建築ト社會

第六輯　第十一号

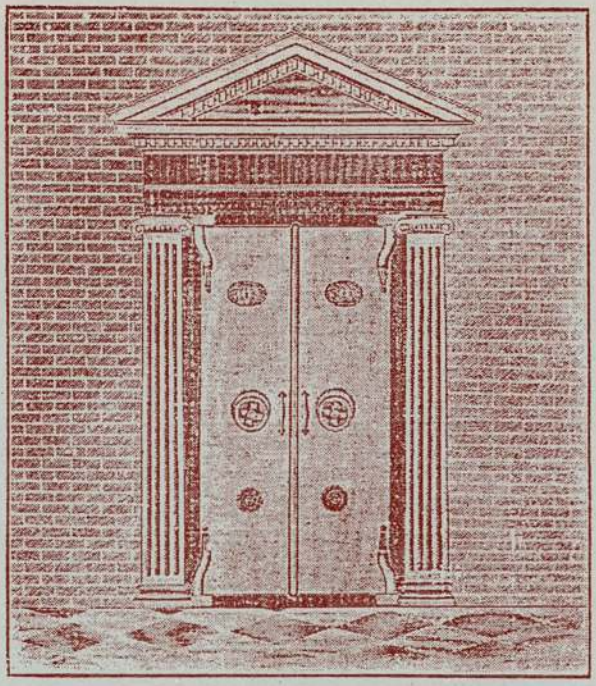


へがもろこ

大正十二年十一月一日

日本建築協會

耐震
耐火 理想鐵扉の出現



金庫
金庫扉 製造界の權威

工場 東京第一工場 東京市京橋區佃島壹丁目
全 第二工場 全 深川區東元町
京都分工場 京都市松原通り大宮西入

營業所 東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋(道修町)
神戸市楠町六交叉點西

大谷金庫店

店主 大谷榮之介
顧問工學博士 細木松之介
獨逸人技師 ア・シュールハルト

設計部ヲ御利用願ヒマス

歐米之文化的建築

佛蘭西式 赤色洋瓦

主なる特長

粘土優良、千度以上の高熱燒製品
美麗堅牢、形態合理
葺土不要、凍害絶無
重量輕減、葺方簡易

◉實質は論より証據　今回關東地方の大震災に於て本洋瓦は剝落破損又は葺方の亂れたもの一枚もなしとの好評を得ました、耐震、耐火、耐寒等一切保證す奮つて御採用あれ

（御申越カタログ定價表進呈）

營業科目
赤色洋瓦
黑色洋瓦
煉瓦類ノ製造販賣並ニ屋根葺上請負

大阪市西區川口町八番地
川口ビルディング內
日本洋瓦株式會社大阪出張所
電話西一二八五番
二二〇八七
二五四〇

工場　愛知縣新川町三河工場
長電話四六番
分工場　愛知縣高濱町高濱分工場
本社　東京市麹町區有樂町三ノ五
電話銀座二一五〇番



建築と

第六輯

口繪　「清荒神」に於ける野田收氏の新邸

〔卷頭〕

生成の秋……二

〔論說〕

○關東震災の教訓……日本建築協會副會頭　工學博士　片岡安　一

○將來の都市建築……工學博士　武田五一　九

○木造建築と震災……工學士　本野精吾　二

○破壞されたる帝都と其の復興（再び）……文學士　黑田鵬心　三

〔研究〕

○關東震災より得たる教訓と將來の災害防止の研究……神戸高等工業學校教授　東京美術學校教授　古宇田實　三五

〔住宅〕

○天成の疎林と地形と鄉土材料と自然を巧みに取りなしたる「清荒神」の簡易住宅郊……邨　四七



社會　第十一號目次

〔都　市〕

○顧みられざる都市夜間照明問題……加藤　善吉・三三

〔資　料〕

○「いぶん・つるーん寺」から
○「あたべるはごら」のバスの窓　工學博士　八戸成蟲樓・五七
　═══埃及旅行記の三═══

〔漫　錄〕

○古代推移の原理と都市の復興・工學士　園部　文雄　六六
○長弓寺の建築と彫刻……池田谷久吉・七二
　═══「古寺順禮」の二═══
○搖れる建築……別所　悌一・七四
○住宅を建てる標準……翠　煙庵・七九

〔會　報〕

○日本建築協會十月中記事

謹告

マツダ電球の作業復舊

▲川崎本社諸工場中X光線科無線電信用管球工場及び研究所科學製品工場を除く第一乃至第五金屬線電球科、メートル科、ソケット科、器具科、瓦斯科、陶器科、重石科、伸線科、導入線科、機械工場等の各工場は全部十月一日より作業を開始致しました

▲マツダ電球ハ在庫豐富にて傭船其他の輸送機關により九月中旬以來大阪、高崎、仙臺に積送し該所より各地に配給致して居ります

▲マツダ電球の纖條は本邦唯一の國産品で其他の材料も自給自足の設備を有しますから今後共決して供給不足の虞は御座いません

神奈川縣川崎町

東京電氣株式會社

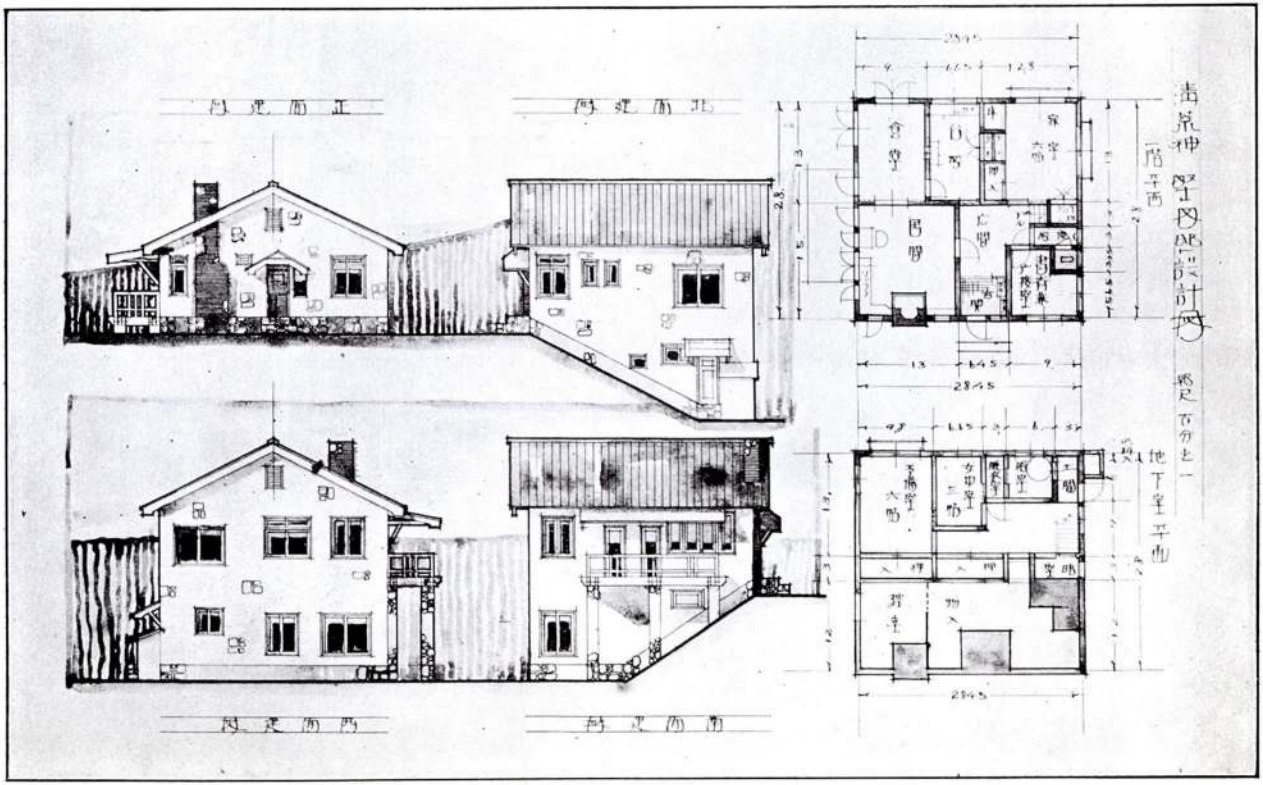
出張所 東京、大阪、門司、名古屋、仙臺、札幌、金澤、福岡、京城、臺北、大連、上海

マツダ電球

マツダとは單なる商品の名稱でなく科學の極致により生産せられたる奉仕の象徴品質の保證であります



野田收氏の新邸 —— 阪急寶塚線「清荒神」にて於る（本文參照）



其の二

「建築と社會」特價分讓

本會發行の雜誌「建築と社會」を創刊號以下大概取揃へて餘分を持ち合せて有りますが此の際左記特價を以て御頒け致しますから、至急御申込み被下いまし

左記

日本建築協會

第一輯　（各號一部ニ付）　特價　金拾五錢

第二輯　仝　金拾五錢

第三輯　仝　金貳拾錢

第四輯　仝　金貳拾五錢

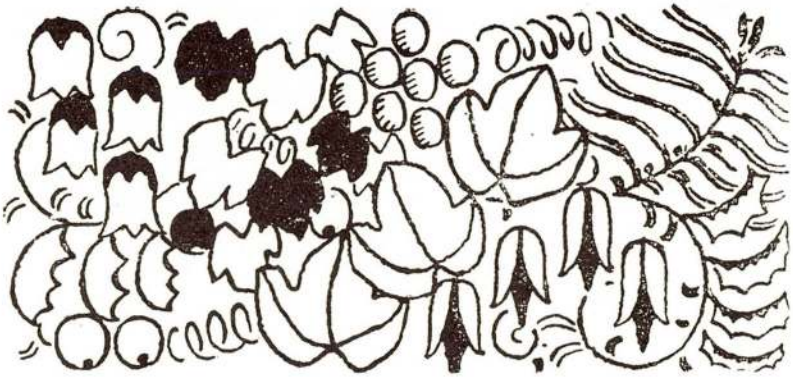
第五輯　仝　金參拾錢

第六輯　（自一號至六號各一部ニ付）　仝　金四拾五錢

（自六號至十號各一部ニ付）　仝　金七拾錢

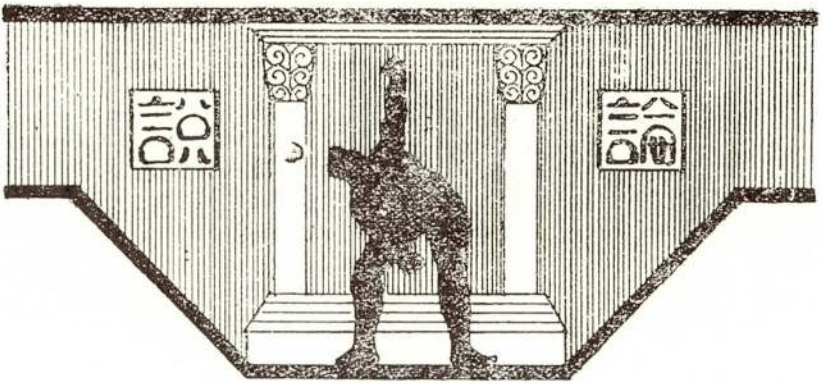
○代金は御申込みと同時に御送附を願ひます

○御便宜のため壹圓以下は郵便切手でも差支へありませんが振替口座へ御拂込み被下ば尚ほ一層御便宜でムります



生成の秋

凡てのものゝ汗と惱みに酬ひられたかのようなる「秋」は、まさしく「創造の歡び」をもて歌ふに相應し生成の萬物は、高らかに、その幸ちを謳はむ、心は、碧空の彼方「惡みの都」に遇ふて、想ひは、遲けき望みに溢れつ。——左なり、遲てしなき、より完き「創造」の途は、酬ふべき「永への歡び」そのものを抱いて、永劫の彼方に、我等の來るを待たなむ。（郊邨）



關東震災の教訓

日本建築協會副會頭　工學博士　片岡　安

一

此度の關東の震災は如何なる程度であつたか、と申さば、先づ東京に於ては、其震動の强さが恰も物體の中心に向つて引かれて居る其力と同じき程度位の强さか、或はもう少しく强い位の力であつて、其力で總ての建造物が破壞を受けたのである。橫濱とか橫須賀、或は小田原の方になると、其力が倍或は三倍、所に依ては四倍位の破壞力を受けたらしく考へられるのである。斯の破壞力の爲に、是等地方の建築物が如何なる形に崩れたかと云ふことは、姑く措いて、其受けた所の損害は可なり甚大なものであつた。其中で、我々の最も遺憾に感じて居ることは、其破壞を受けた後に生じた所の火災の損害である。殊に東京が受けた所の損害は約五十億と稱へられて居るが、其五十億圓の損害の中の殆ど九割又は九割五分と云ふものは、震災後の火災が齎した所の損害である。併しながら、火災が無くても、此度の震災は我々都市民の最も深く研究を要する實例であつたのであるが、私共が常に恐れて居つたのは、地震と之に伴ふ所の火災、即ち兩方の損害が同時

に來ると云ふことの其慘害を常に恐れて居つたのである。所が、不幸にして、我東京市も、又横濱其他の町村に於ても、可成り烈しい所の震災を受けた後に、又前古未曾有の大火災に因つて非常な慘害を受けたのである。

二

此慘害は、社會の可成り多數の方面からは、全く天災として觀られて居り、避くべからざる天災であつた、人智の如何ともすることの出來ぬ所の慘害であつた、と云ふ風に考へて居る人がなか〳〵多いのである。併ながら、斯の慘害は、果して人智の能く防ぎ得ない所のものであるや否や、と云ふことを考へてみると、私共の考では、是等の慘害は容易く防ぎ得る所のものであつたのである。容易く防ぎ得る所のものを防禦しなかつた、徒に安閑として居つた爲に、斯の慘害を受けたのではないかと云ふやうに考へるのである。殊に、火災に對する防禦に就いては今日技術上の進歩によつて十分に之を防禦し得るやうな時代になつて居ることは、私が此處に申述ぶるまでもなく、讀者の知悉しゐられる筈である。

三

歐米各國の都市に於ては、大中都市は勿論、小さな村落に至るまでも、其重要なる部分には決して木造の建築を許されないのであつて、火災防禦の爲には、凡ての準備が行屆いて居るのである。尤も、亞米利加の都は、火災の本場であつて、毎年亞米利加合衆國の受けてゐる火災の損害は平均五億圓となつて居る。又十年二十年の昔に遡つてみれば、或は市俄古の大火があり、『バルチモーア』の大火あり、或は又有名なる千九百六年の桑港の大火のやうなものがあつた。其他數へ來れば、亞米利加の都は、なかなか澤山な大きい火災に出會つて居るのであるが、それ等の火災の慘害に鑑み、今日は防火に對する凡ての準備が行屆いて、都市の重要なる地區は總て防火構造を以て成て居るのである。歐羅巴では、彼の千六百六十六年の倫敦大火以來、大火らしいものは一つも無いのである。恐らく、今後も大火と云ふもの

は無いであらうと私は考へる。

四

然るに、我國の都の實際を少しく考へて見ますと、如何なる都でも全部木造である、と云つて可い位に木造建築の大集團が中央を占めて居り、場末に於ては尚更である、我東京市の如きは、大正七年末の調べに據ると、約四十萬に近い所の家屋が大部分木造であつて、煉瓦、石造の建築が一萬にも足りない、漸く七八千のものが煉瓦或は石造の建築であつた。而も、其ものが、果して防火建築であるや否や、耐火構造のものであつたか、どうか、と云ふことをみると、成程、外面は煉瓦の家であるが、其實質は決して耐火構造ではなかつたと云ふやうなものが大多數を占めて居るのである。我々が育つた所の帝國大學の如きは、其大部分が煉瓦造であつたけれども、內部は燃燒質のものであつた。最も貴重として居る圖書館が燃えて亡くなつたのは千載の遺憾であるが、是等のものは、絕對な耐火構造の建築でなかつたのである。其他、諸君が御覽になつて、相當堅牢なものであつたと云ふ風に見られて居つた建築物が、大部分本當の耐火構造のものではなかつたのである。斯う見て來ると、火災に抵抗し得る所の建築と云ふものは、千に一つしかなかつたと云ふことになる。百に一つ所か千に一つが漸く火災に抵抗し得るものであつたと云ふ風に、低級な建築物にのみ依て充されて居つたのである。其低級建築で充されて居つた東京市が、震災の後に起つた所の約七八十の失火の爲に——偶々襲來して居つた低氣壓に依て約十七八米突の速力を持つた西南の風に煽られて全滅したのは、少しも不思議はない。私は、大正五年から此事あるを凡そ考へて、隨分と筆に口に當局に建議を致したり、一日も早く東京市の全滅する危險を防ぐべく努力されんことを忠告したのである。又、大正七年一月には、我日本建築協會から、之を建議案として、當局を鞭韃したのである。

五

獨り東京市のみならず、我重要なる所の大中の都市が、若し一朝全滅した時には、其損害が果して如何なるものであるか、維新前の如く市民が儉約をしたならば、之を回復し得るといふやうなことは今日は出來ないのである、今日我々の經濟は、總て國際舞臺に移つて居る。國際生活に移つてゐるのであつて、凡ての生產組織は、全國的になつて居る。隨つて、一部分の損害は、其部分のみの損害に終らずして、世界的に、國家的に或ものが非常な苦痛を感じ、或は或部分の生產は殲滅するのである。金融は止り、貿易は傷き、將來立つ能はざる狀態になるもの比々皆然らざるはなし、と云ふことを考へざるを得ないのであるから、何とかして疾く之を救ふ途を立てなければならぬと云ふので、我日本建築協會に於ては、非常に努力して現在の內務大臣にして、同時に復興院總裁である當時の內務大臣後藤男爵と協議を遂げた結果、都市計畫調查會が成立つたのである。其都市計畫の力に依て我都市の危急を救ふ、危險を防ぐと云ふことに向つて幾多の法律、凡らゆる施設が運用されたのであるが、不幸にして、斯の運動の眞髓が十分に了解されなかつたのは、私共の非常に遺憾に感ずる點である。

六

法律は制定されて、最近に至ては、防火地區、防火地帶の制限が六大都市に於て將に施設されんとし二三の都市には既に地帶を決定されたのであるが、其運用遲々として捗まず、防火地區運用の形は出來て居るが、當局も餘り熱心でなく、市民も斯の危險の迫つて居ることを餘り深く考へなかつたが爲に、件の運動は如何にも緩漫なる進み方をして居つたのである。東京市の如きは、可成り大きな部分に防火地區を設け、防火地帶が設定されたのであるが、其實現は果して何時の事であるか、と云ふことに就いて、我々は、實に危憂を感せざるを得なかつたのである。私共の考では、防火地區、防火地帶と云ふものを設定した以上は、其實現を成だけ疾くしなければ、決して意味をなさぬのである。少くとも三年五年と云ふ年限の間に、防火地區の完成を圖ると云ふことが、我國に於ける都市の危險を救ふ所以である

と思ふ。然るに、斯る意見を述べても、當路の大官、或は市の有力者と云ふものは、一般に之を採用する勇氣が無く、民間の經濟を壓迫するから、木造の建築で可からう、將來改造する時分には之に制限を加へたら可いと云ふやうな生温い態度であつた。斯る態度であつたならば、何年經ても都市の改造は出來得ないのである。十年經ても、二十年經ても防火地區の中で、新築をせざる以上は木造の家は依然として木造として存するのであるからして、防火地區の目的を達し得ないのである。不幸にして、此度、大火が是等の地方を襲つて、我東京及横濱に於ては全市を殲滅する位の勢で火災が蔓延をしたのである。東京に於ても、僥倖にも山の手の方面には失火が無かつたからして、山の手は幾らか殘つて、東京の約三分の一は殘つたのであるが、若しあの當時に目黒の方面、澁谷の方面、或は小石川の方面に失火があつたならば、その成行きは恁麼なものであつたらうか、恐らく、今日は東京に一軒の家もない、と云ふことになつたであらう。

天祐にも、山の手の風上の方には失火が無かつたのである。恰も、當日は初め南の風が盛であつて、夕方から強き西風に移つたのである、其事情から考へてみると、品川邊に失火があり、高輪邊にも失火があり、又麻布の方にも失火があつたと云ふことであるならば、恐らく東京市は全く燃え盡したらうと私は考へるのである。約、東京市は全滅すべき狀態に置かれてあつた爲に、全滅したのであつて、決して天災ではないのである。人智で防ぎ得ることを防がなかつた爲に、東京は全滅に近い慘狀を來したので、要するに、當然の成行きと云つて可い。即ち、天が之を罰したのである、と申して聊かも差支ない。若し此防火地區の制限、防火地帶の制限が十分に實施されて、それが九月一日の震災前に出來て居つたならば、東京市の火災と云ふものは非常に局限されて、殊に重要なる事務を執る所の部分は依然として其儘殘り、翌日から立派に事業が出來たらうと思ふのである。所が、斯る危險を知らずして居つたのか或は知りながら怠慢で居つたのか、此實行、即ち運用が遲れた爲に、竟に今日の慘害を生じたと云ふこ

とは、寔に遺憾此上も無いのである。

然らば、震災に對しては如何なることであるか、といふに、震災に就いては、我々技術家の方面に於て、之に對抗する所の構造法は十分に研究されて居るのである。明治二十何年であつたか、今明瞭な記憶はないが、濃尾地方の地震以來、我文部省に於ては震災豫防調査會と云ふものが設けられて、其調査會には地震學者、地質學者、土木、建築、機械と云ふやうな方面の凡ゆる專門家（オーソリチー）を網羅して、今日まで約三十五年乃至四十年の間、所謂地震の物理學的性質の研究、地質學的の研究、及び是が構造物に及ぼす所の影響に就いての深い研究が積まれたのである。其間、屢々我國の各地方、及び諸外國に起つた地震の實際を調査して、可成りの研究が行はれたのである。又、構造等の進歩の結果、今日は耐震的の建築を造り得るやうになつて居る。而して、此度の地震は、其研究の結果に依て出來た所の建物、及び研究以前の建物、或は因襲に捉はれた建物、各種類の建物が澤山陳列してある所に、其破壞力を以て、これ等の結果を試したのである。故に、此度の地震は、我建築界に於ける凡ての標本を、其破壞力に依て試した所の非常に大きな實驗であつたのである。その實驗の結果は、大體に於て我々が震災豫防調査會の研究と、又種々な構造學の理論から推定して居た所と、其結果の間には何等の差を見なかつたのである私は、地震の當時、彼の地に居つたが、地震の起るや否や直ぐに飛出して、我々が常に疑問として實驗をして見たいと思ふて居つた建物の被害に就いて調査を始めたのであるが、可成り大きな損害を受けたものもあつた。併しながら、それ等の損傷は、殆むど我々が豫て想像し、推定して居つた通りのものであつて、一つも不思議のものは無い。大體に於て、理論及び研究の結果推定し得たやうなものばかりであると云つて可い。故に、古い建物にして、例へば明治十年前後に出來た所の煉瓦の建物であるとか、或は從來の日本風の建築と云ふものは、豫定の通り大部分破壞した、素より東京に於ては、地震の破壞力がそれ程大きくなかつた爲に、從來の日本風の家も、大部分殘つた、大部分は損害を受けなかつたのである。殊に、山の手方面では、地震の破壞力が小さい爲に、大部分無事であつたのである。けれど

も、それは、從來の日本風の建築に耐震力があつた、と云ふ譯ではないのである。要するに其位な程度の地震には耐へ得る、と云ふに過ぎなかつたのであつて、今少し大きな破壞力が來た時分には全潰すると云ふ運命にあつたと云ふことは、湘南地方の建物を見れば、一目瞭然と判るのである。

七

之を要するに、我建築界は今日の進歩せる所の構造學と震災豫防調査會の研究調査に依て得た其成績等に藉り、我國は地震國であるとは云ひながら、兎に角安心して住ひ得るやうな建築が出來得る。經濟的にも確に出來得る、と云ふことだけは申上げても可い。けれども、我東京及び横濱其他の地方に於ける所の此度の地震に遭つた建築の大部分が、今日の進歩せる所の建築術に依て築かれたものでなかつたことは、甚だ遺憾であるが、是亦致し方がないのである。故に、私共は、此度の關東大震災に就いて、是等の事實を能く咀嚼玩味し、都市の樞要地區は必ず耐火構造の建築を以て充し、燃燒質の建築は許さないと云ふことにして、同時に最近の建築術に據る所の耐震構造のものを之に施し、所謂耐震耐火の建築を以て我々の生命財産を安固にし、さうして本當の都市としての文化生活の向上發展を永遠に期すると云ふことをやらなければならぬと云ふことを、理窟でなく、實際の惨害を以て我々に教へられたのである。斯の惨害は、我々に對して偉大なる教訓である、我々應用科學を以て立つ者の小さな理論、小さな意見よりか、更に〳〵偉大なる力を有つた所の天の實驗に依て我々の眼の前にそれを示したのである是は、我々に於て別に不思議とは思はない。眞理は同じであるけれども、我々の小さな力、小さな意見で以ては、我日本國民の前途を救ふことが出來なかつたのを、天が實際的に之を示したのである。即ち、我々が社會に向つて教へんとする所は、天が教へて呉れたのである。斯の點に於ては、我々の努力運動と云ふものは、如何に微弱であつたかと云ふことを恥ずる次第であるが、同時に、諸君に於ても斯る大教訓を受けられたのであるから我々の從來の運動に共鳴され、都市の大改造を以て我國の文化の進運を立直す、と云ふ決心を有たれんことを希望する譯である。

將來の都市建築

京都帝國大學
工學部敎授　工學博士　武田五一

一

今回の東京の地震は非常な不幸であり、同時に慘害ではあるけれども、併し我々專門家の者に取ては極めて貴重なる實驗材料を供して呉れたことでもあり、又非常なる費用を拂つて大實驗が天に依て行はれたことになつたのであるから、此非常なる犧牲を其儘無駄にせず、此大犧牲を活して、それを以て將來我國民の幸福に資さなければならぬ、所謂禍を轉じて福と爲すと云ふことを以て此際の『モットー』として行かなければならないかと思ふ。

今回の地震に限らず、何時の地震でも、地震の損害と、又それに伴つて起る火災の損害は殆ど相半ばして居る、今回の東京の地震に於ては寧ろ地震の損害よりは火災の損害の方が多大である、此地震の損害と火災の損害との比例は、是まで起つた數多の實例に依て見ると、地震の損害が酷いものがあり、火災の損害が極めて大なるものがある、桑港の震害の如きは地震の損害よりは、火災の損害の方が强く、又千六百九十三年に起つた『シシリー』の地震の如きは殆ど火災はなくして、震災のみであつた、が、何れにしてもさふ云ふ風に地震と火災は何時でも一緒に伴つて來るから、地震の損害と一口に言ふけれども、實際はどちらの損害であつたかと云ふことを能く調べて見なければならぬ。

二

所が我國の地震の特徵として、地震の時には必ず大火災が起る、そして地震に殘つた家も、火災には

殘らないと云ふ運命に遭遇して居る、例へば安政二年の大震災に於ても地震の損害も相當あつたが、火災の損害の方が多く、約七千人の死者を出したといふことである、又最近の濃尾の震災も相當激烈な地震であつたが、矢張り直接地震に依る損害よりも、火災の損害の方が寧ろ多かつたさうである、それで今回の東京の地震は九月一日の正午に近く何等の豫徴なく、突如として東京及び横濱を首め、湘南地方の一帶を震駭したのであつて、其損害の及ぶ所非常に廣く、一府四縣に及び、其中最も大なる損害を蒙つたのは東京横濱である、但し地震の害は東京横濱よりは寧ろ湘南地方に於て強かつたのであるけれども、何しろ東京横濱は經濟の中心でもあり、人口の密集して居る所であるから、其損害は到底湘南地方の損害とは比較すべきものではなかつたのである、又從來我國及び諸外國の歷史に現れて居る地震の例を調べて見ても、今回の東京の地震程慘い結果を呈して居るものはない。其死者だけでも約七萬二千と云ふ數を算して居る、是は東京だけで今日まで警察の手で調べ上げたものゝ數であるから、警察の手に掛からない、もう既に灰になつてしまつたり、遠く海に流れて行つたり、或は川底に沈んで、其儘揚つて來なかつた者の數を合せると、恐らく更に二割若くは三割を增すに違ひない、兎に角震災の結果として約八萬近い人間が死んで居る、八萬人も殺した地震は曾てない、是までの一番大きな地震は『メッシナ』の地震であらうが、それでさへも死者は約六七萬人である、『ソスポン』の地震も可なり大きかつたのであるが、是亦約五萬人しか死んで居らぬ、其他何れの地震に於ても死者六萬人を越した例は無い、所が此度の地震に於ては東京市中のみで八萬近い人間が死んで居ると云ふことは如何に其損害が甚しかつたかと云ふことを之に依ても推察することが出來る、況や其財產上の損害に至ては實に驚くべきものがある、どう云ふ計算から出たのか知らぬが、約五十億圓の損害だと云はれて居る、是は現在の土木建築の復興に要する費用が五十億圓であつて、其他個人の失つた財產などを其中に入れて考へれば、恐らく其三倍四倍にも增加するであらう詰り歐洲戰爭の費用と殆ど相匹敵するが如き多額に上る斯の如き

は地球が始つて以來と云つては少し言ひ方が大きいやうであるが、兎に角歷史有つて以來曾て無い大損害である。

三

然らば此大損害がどう云ふ風な現象から起つて來たかと云ふと、東京は全部燒失したんぢやない、約半分は殘て居る、僅か東京の半分だけが地震と火事でやられた其結果が斯の如き大損害を來したのであるから、若し東京が全然亡くなつたのであつたならば、其損害額たるや實に驚くべき數に上るだらうと思ふ、幸にして半分は殘つたのであるが、不幸にして風がもう少し續いて、風の吹き廻しで以て山の手の方に火が及んだならば、死傷者も更に數倍する數を出したかも知れぬ、兎に角東京の人口が二百五十萬位のものであるから、其中で十萬人や十五萬人の死傷者は無論あつたことゝ思ふ、さう云ふことを考へて見ると、實に驚くべき損害であり、又同時に日本のやうな斯う云ふ小さい島國で、僅か東京の土地一つに起つた所の震害の爲に斯く財產を失ひ、斯の如く人命を損ずると云ふことは、是は大に考へなければならぬことではないかと思ふ。

關西の方々は東京に於ける地震の狀態は纔に新聞紙或は傳聞に依て御承知のことであらうと思ふが、私はどうか皆樣が何等かの機會に於て東京の震災の跡を一度は御覽になることを希望する、震災の跡が如何に慘憺たるものであるか、悲慘なものであるかと云ふことは一遍行つて見なければ、到底分らない話で聞いたばかりでは迚も分らない、又話には場合に依ると、嘘もあるし、おマケもある、又おマケしなくても可い所におマケがあつたりして、到底實際の狀況を知ることは出來ぬから、一度は行つて、如何に火災の損害が大であるかと云ふことを一度は御覽になつて置くことが都市の住民として將來非常に必要なことでないかと考へる、之に付ては先にお話があつにやうに震災豫防調査會などに於て屢々警告

を發して居り、又近頃は飛行機に關係のある方々が、飛行機から爆彈を投下された時には都市の狀態はどうなるか、東京市の如きは數時間ならずして全然滅亡してしまふと云ふやうな種々なる意見なり統計なりを發表されて居るが、是等も實際さう云ふ目に遭つたならば、どんな慘害を呈するかと云ふことは今回の東京の慘狀を見れば大體見當が付くと思ふ。

四

其東京の大慘害の狀況は、寔に絶大なものであることは今更ら申すまでもないが、兎に角斯の如き大損害は之を防ぎ得るものか、防ぎ得ないものかと云ふことを考へて見ねばならぬ、若し實際防ぎ得ないものなら、止むを得ぬが、人力を以て防ぎ得るものならば、どうかして其災害を防ぎたい、殊に我國は地震に對しては非常に惠まれた國であつて、餘り有難くはないが、兎に角地震には緣の深い國である、小さい國であるけれども、殆ど我國の全長に沿ふて、我國の南の方の海の中に世界的の地震帶が橫つて居つて、此世界的地震帶の彼方でも此方でもチヨイ〳〵地震が起る、殆ど毎年、或は一年の中に數十回起る、其中には時々大きいのが起つて來る、それが周期的に起ると云ふこともあるが、敢て周期的でなくても、兎に角五十年六十年經つと、一遍位は必ず大きいのがやつて來る、大抵地震と云ふものを忘れたやうな時分にボカンとやつて來て、日本人を驚かせる、で、此時々起つて來る大地震を止めることは到底出來ない、地震を止めるには地球を改造するより外途はない、地球を造り變へることは到底人間の力では出來ない、さうなつて來れば、唯どんな地震が起て來ても、それに對して安全を期し得る方法を講ずるより外に途はない、所が幸なことには地震の性質が近來能く分つて來た、昔は地中に大きな鯰が居て、それが暴れる爲に地面が搖るので、其力たるや廣大無邊なものであると云ふ風に考へられて居たが、近來の研究に依ると、地震の力はそんな廣大無邊なものではない、一定の度合があつて、それ以上

のものは殆ど無いと云ふことが明になつて來た、是まで起つた大きな地震を器械で測つた其結果は、何れも其力には或程度があつて、それ以上には出ない、地震學の方で謂ふ所の加速度であるとか、或は震度を測つて見ると、さう大して大きくはないものである、之を數字で表すと、震度が〇・四以上に達した地震は曾て起つたことはない、從て〇・四——四割以上の地震に付ては我々は別に考慮を費す必要はないと云ふことに歸着して來る、地震の威力と云ふものは斯の如く局限せられたものであつて、さう大して驚くべきものでない、大抵強つた強さで起つて來るものであると云ふことが、分つて來たのであるから、さうなれば、そこに學問の力を應用して、其地震の震度に耐へ得るだけの構造にすれば、それで家は安全であると云ふことになる、所が地震の力は三割或は四割と云ふけれども、其三割四割と云ふものは、是は風の力なんかと違つて、建物の重さに依てそれに及す力が變つて來る、重いもの程其損害は大きい、詰り地震に因る損害は建物の重さに正比例する、即ち百噸の建物と千噸の建物があれば、千噸の建物は、百噸の建物に比較して、十倍の強さで以て損害を受けると云ふことになる、斯の如きことが段々と分つて來たのであるから、其震度に耐へ得るやうに計算して、其結果から建物の設計をすれば、少しも恐るべきことはない、それで以て地震の力をウンと持耐へて行きさへすれば可いのである、怪物でも、其正體が分らぬ間は恐いものであるが、怪物の正體が分つてしまへば、少しも恐しいものでないのと同じやうに、地震も其正體が大體分つて來たから、そんなに恐しいものではない。

五

さう云ふ譯で、地震の性質が分つて以來、又其地震の強さと云ふものを計算の中に入れて以來の建造物は確に地震に強いものであると云ふ自信は皆有つて居たのである、近來東京や大阪には澤山大きな建造物が出來て來るが、それ等は皆、地震の力を計算に入れて、勘定して出來上つたものである、併し斯

の如き計算の結果と云ふものが果して強いものであるか、弱いものであるかと云ふことは、一寸證據を以て示すことは出來ない、それを證據立てやうと云ふには一度壞して見るより外はない、例へば朝日新聞のあゝ云ふ建築物にしても、四割の地震に耐へ得るものであると我々は信じて居るけれども、是が果して耐へ得るや否やと云ふことは、實際壞して見なければ、分らぬ。けれども折角建つたものを壞すと云ふことは出來ぬし、又そんなことをやるべき筋合のものでもない、所が幸か不幸か東京に大地震が起つた、其力は山の手の方で一割五分、下町の方で三割五分位の強さのものであると云ふことが略々分つた、それが東京中の建物を搖り動して試驗をして呉れた結果、實に正確に我々の豫想を證據立てゝ呉れたのである、言ひ換へれば、それで以て誤魔化し物はスッカリ其化けの皮を剝いで呉れた、中には全然倒れてしまつたものもあり、又全然損害なく、百尺近い建物が眞直ぐに、何處で地震が搖つたかと云ふやうな面で立つて居るものもある、是は確に一つの結構な試驗をして呉れたのであつて、其試驗の結果我々の得る所は非常に大きいものがあるし、又建築の構造學上の理論が實際に於て少しも間違ひがなかつたと云ふことを立派に證據立てゝ呉れたのである、是が爲に我々は將來に於ける都市建築に付て非常なる自信を得た、若し計算を正確にし、設計を完全ならしめ、同時に工事の施行を正直にやつたならば地震は少しも恐るべきものでないと云ふことの結果に到着したのである。

六

併ながら地震には何時も火事が附て廻る、それはどう云ふことであるかと云ふと、若し今言つたやうな耐震的構造のみであるならば、火事は左程恐るべきものではない、第一火事は出ない、火事が出るのは、火の起るべき原因がある上に、木材とか紙とか云ふものが落ちて來て、火が點いて、火事になるのであるから、耐震構造のみであるならば、火事は起らない、所が不幸にして我國の都市はまだ〳〵此耐

震構造が多くない、全市中一割か二割位しか耐震構造は出來て居らぬ、八割乃至九割と云ふものは皆木材である、恰で薪の積んである中に耐震構造が立て居るやうなものである、だから一朝地震が起つたならば、其八割乃至九割の建物は皆火になり易い、恰度薪を積んだ其中に耐震構造を置いて、サアお燒きなさいと云ふ形で、詰り爐の中に耐震構造を入れて、燒いて居るのと同じことである、斯うなると火事の威力は實に恐るべき結果になつて來る、何時も地震の後の火事の力と云ふものは非常なもので、桑港の地震の時に調査したものに依ると、一番強い所で約二千度近い熱度があつたと云ふことである、東京の今度の震災に付て我々が行つて調べた所に依て見ても、非常に強い熱度が出て居る、例へば普通建築材料として使ふ金屬の中で一番熔け難いものは鑄鐵であるが、其鑄鐵が軟くなつて歪んで居る例がある電車線路にある眞中の棒は鑄鐵で出來て居るが、あの棒がズッと歪んで、弓のやうになつて折れて居る又銀は攝氏の千度乃至千二百度位で熔ける金屬であるが、其千度近い熱度でなければ熔けない銀貨が熔けて一塊になつて居る例が幾らもある、尙ほ是は私が實際見たんぢやないけれども、或金庫を開けて見た所が、其金庫の中に入れて置いた所の金剛石が燒けて、炭になつて居つたといふことである、金剛石が燒けて、炭になるには矢張り千度近い熱がなければならぬ、而も金庫の中に入れて置いた金剛石が燒けたと云ふのであるから、金庫の中でさへも千度近い熱度に達して居たと云ふことがそれで分る、斯う云ふ風な熱度で熱せられたならば、建築物は如何なる材料を以て造つてあつた所が、到底火を防ぐことは出來ない、防火戸や防火窓と云ふやうなものも大抵鐵を使つてあるが、鐵が既に曲るやうな熱度の中にあるのであるから、防火戸などの役に立たなかつたのは分り切つたことである、金庫も鐵で出來て居るが、其鐵が柔くなる位であるから、斯うなつた以上は、もう到底防火建築と云ふものゝ效果を完全に保つことは出來ぬ、又都市である以上は消防機關が備つて居るのであるから、まだ斯の如き溫度に達しない前に其消防機關が完全に働きさへすれば、可いぢやないかと云ふやうな說もあるが、事實に於てそ

れも駄目である、今度の震災に於ては九十六箇所から火が出たと云はれて居る、約百近い火が彼方、此方から出た、さうなつては、少々位喞筒があつても、到底追付くものでない、東京市内に三十九臺、約四十臺の喞筒しかなかつた、それが火が出たとすると、彼方此方に走り廻つて、スッカリ壞れて、役立たぬやうになつたと云ふことである、さう云ふ狀態であるから、少々消防機關があつた所で、迚も斯う云ふ火には勝てない、是は私が見たのではないが、銅板が青い焰を出して燃えて居つたのを見たと云ふ人がある、又或人は道路の『アスファルト』が燒けて、火道を成して居たと言つて居る、斯う云ふことは人聞きであるから、餘り大した權威はないけれども、兎に角非常なる溫度に空氣が熱せられて居つたと云ふことはそれを以て想像することが出來る、又事實に窓硝子がベロ〳〵になつて、熔け落ちた窓から火が這入つて、部屋の中を燒いた例がある、或は天井にある硝子が熔けてしまつて、天井から火が這入つて、家の中を燒いたやうな例もある、斯うなれば、如何なる方法を以ても、到底耐火構造と云ふものは出來兼ねることになるから、若し將來の都市が火災から脫れやうとするには、どうしたら可いかと云ふことになれば、建築家の考慮のみを以て火を防ぐことは出來ないと云ふ結果に到着する、建築家の方では耐火耐震構造と云ふことに付ては始終研究を怠らずやつて居るが、都市の建築の配置狀態が現在の如く木造建築が多い爲に、折角の耐火構造も其効を奏しないとなつて來れば、是はどうしても都市計畫から考へて、火災を豫防しなければならぬと云ふことになつて來る、結局將來の都市建築と云ふものに付ては種々の考慮を拂はなければならぬ、所謂建築家の方の努力と、都市計畫家の方の努力と相俟つてこゝに安全なる都市を造らなければならぬと云ふ結果になつて來るのである。

七

それでは其計畫はどうしたら可いかと云ふと、都市計畫としては、どうしても地質の最も安全な所に都市の中心を置くといふことを念頭に置いて貰ひたいと思ふ、聞く所に依ると、今度東京に復興院なる

ものが出來て、東京市の復興に對して非常なる大規模の組織を以て非常なる努力を拂はれるやうに聞いて居るが、此復興院が若し眞に東京市を愛する人々から出來て居るならば、私は次のやうな事項を十分考慮に置いて、將來の東京市を造り上げべきものであらうかと思ふ、區々たる感情に支配されたり、或は下らない干渉に左右されて、若し國家百年の大計を誤るやうなことがあつたならば、甚だ遺憾なことでないかと私は考へる、但し私共の言ふことは固より理想であつて、實際上其理想通り行へないやうな種々な事情もあらうけれども、兎角理想として我々が希望する所のものを二三茲に申上げたいと思ふ。

先づ第一に道路としては、都市の中心地は必ず地質の良い所に置かなければならぬと云ふことを第一に頭に置きたい、詰り地震の損害は地質が軟弱であればある程、其損害は大きいのである、故に成べく地質の硬い所に都市の中心を置かなければならぬ、所が東京の下町殊に本所深川邊は有名な地盤の惡い所である、此處に再び都市の中心を置かれると云ふことは、又將來何年かの後に於て再び斯の如き大損害を持來す所以だらうと思ふ。

又今度の震災に於て特に感ぜられたことは避難の場所が少かつたと云ふことである。是が八萬近い死人を出した原因である、是非避難所を設ける必要がある、避難所としては、平常地震の無い時に唯空けて置くのも勿體ないことであるから、是は所謂公園にするとか、大きな道路にするとかして、平常はそれ〴〵使用し、一朝事ある際には避難に使ふ、此點に於て東京の日比谷公園は非常に役立つたのであるが、日比谷公園だけでは收容し切れない、又深川の被服廠跡の如きものがあつたけれども、是は元々避難所に造つたのでないから、避難所として、甚だ設備が不完全であつた爲に、被服廠に這入つた人間は皆死んでしまつたと云ふ結果になつた、將來の東京市に於ては此避難所に付て非常なる考慮を拂ふべきものでないかと思ふ。

八

又今回の震災に於て痛切に感じたことは水の不足なことである、平常は水道があつた爲に、火事があれば、其水道を利用して消せたけれども、今度のやうな大地震に遭ふと、水道は何も役に立たない、實際水道は破壞されなくても、百箇所近くも火事が出れば、百箇所の水を出さなければならぬ、さうなると水道の壓力は減じて、到底澤山の水を出すことは出來ぬ、斯の如き理由から、水道と云ふものは先づ消防の用をなさないことになるから、更に池を掘り、井戸を掘り、堀を掘つて、始終水を溜めて置く必要がある、是等も池ならば、公園に設けるとか、種々な方法を講じて、平常の時には都市の美觀を添へるやうにして置いて、イザと云ふ時にそれを利用すると云ふことにしたいと思ふ、東京の宮城の周圍にある外濠は大概水があつたけれども、あの邊は所謂耐火構造ばかりであつて、外濠の附近には火事が起らなかつたから、幾ら水があつても、所謂寶の持腐れ、猫に小判で、役に立たなかつた、洵に勿體ないことで、若しあの水が下町の方にあつたならば、餘程防火の効を奏したことであらうと思ふ。

街路樹が今度の火事で非常に役に立つた所がある、日比谷の公園が燒けずにあつたと云ふことも、日比谷の中にある樹が大に役立つたのであるが、街路樹が防火の効を奏すると云ふことは今回初て分つたことである、殊に濶葉樹を以て街路樹とするものが最も能く其効を奏したらしい、所が松、杉、檜と云ふやうなものは却て火を呼んだと云ふことである、あれは松の樹の中にある脂が火を呼ぶのであつて、斯う云ふ樹を植えると、却て火事を擴げて大きくするやうなことになる。

又都市の計畫に付ては風向きと云ふことも始終考慮に置いて行かなければならぬ、東京の現在の市街は東京に始終起る所の風向に對しては何等の考慮を拂はず、無頓着に出來て居る、あの須田町から新橋に至る所の大きな道路が若し直角に付て居つたならば、今回の火災はもうチット少かつたらうと思ふ、又水道橋から神田の神保町に至る所のあの通路が直角に出來て居つたならば、もうチッと損害が少かつたらうと思ふ、兎に角大なる市街は風向に直角に置かなければならぬと云ふ原則を無視して東京の市街が

出來て居つた爲に大分損害を大きくして居る、之に付ても一般の風向を研究して、將來の都市の安全を保つて行かなければならぬと思ふ。

九

次に防火地區の設定が甚だ大切である、今回丸の内が少々煉瓦が落ちたものがある位で、何等損害なく又何等危險なことなくして、全體が安全であつたと云ふことは防火地區であつたからである、若しあの邊が防火建築で出來て居なかつたならば、もう少し死傷者も多く出したであらう、幸にしてあれが燒けない建物であつたから、皇居も安全であつたのであらう、若しあれが木造建築の集團であつたならば洵に畏い次第であるが、或は皇居に火が及んだかも知れない、斯樣の如き防火地區を彼方此方に拵へて、所謂燒け止りの場所にする必要がある。

十

又今度の火事の起つた其火元と云ふものを色々研究して見ると、全體とは言はないが、多くは藥品から起つて居る、例へば學校の發火は大抵其化學教室から出て居る、化學教室には色々火が發するやうな藥品があるから、それから火が出た、又飛火の多くは矢張り發火物があつた所に起つた、故に發火物を取扱ふ所の建築物は特に注意して建築しなければならぬ、是は從來も大分注意して居るけれども、是まで以上に斯かる建築物に付ては注意することを必要としやしないかと思ふ。

尙ほもう一つは、震災火災の際に於ける市民の訓練と云ふことを大にやりたいと思ふ。今回の東京の損害は直接火災なり震災の損害も無論多かつたけれども、實際火災、震災よりも、寧ろ人が慌てゝ怪我をしたのが多いやうに聞いて居る、是は獨り日本ばかりのことではなく、外國に於てもさうであつて、

一萬人の中五千人までは慌てゝ死ぬ、人に踏潰されたり、川に落つこちたり、梯子段から落ちると云ふやうに慌てゝ死んだ人間が多いのである、慌てると云ふことが大に地震の損害を大きくすることである例の東京の朝鮮人騒動にしても、あゝ云ふ騒動が起ると云ふのは、矢張り人間が慌てるからである、若しもう少し人が落付いて居つたならば、あんな騒動は起らずして濟んだかも知れない、兎に角地震及び火災に對する訓練を不斷からして置いたならば、もう少し損害が少かつたかも知れないと思ふ、此訓練と云ふことは可なり難かしいことであるが、併し出來ないことではない、平生に於て市民が相當訓練をして行つたならば、もう少し落着てあゝ云ふ危急の際に處することが出來るだらうと思ふ。されば斯の如き點に注意して、將來の都市を計畫し、又今回の地震の損害を有效に利用して行つたならば、私は今回の損害が五十億圓であり、百億圓であつても、敢て高いものではない、十分にそれを償つて餘りあるものであらうと思ふ、幸にして今日は我國は平穩無事の時であつて、外國と戰爭をやつて居る時でもないから、大變可しいけれども、是が不幸にして外國と開戰中でもあつた時には實に恐るべき結果を來したであらうと思ふ。大阪の如きも將來イツ何時地震に襲れるか知れないと云ふ運命にあるのであつて、此次ぎ起るべき所の地震は大阪附近に起るだらうと云ふことは誰しも一致して居る議論である、是は單に我々のみでなく、世界中の學者の一致して居る議論である、それが將來五十年にして起るか、百年にして起るか、それは分らぬけれども、兎に角大阪と云ふ所は一度は大地震に襲はれ、呪を受くべき運命を有つて居るのである、それであるから、東京に於ける損害に鑑みて、大阪はどうかあゝ云ふ損害を再び繰返さないやうにやつて行きたいものと思ふ、是は單に我々建築の方に携つて居る者ばかりでなく、各人の努力に賴るより仕方がない、我々は建築家として完全なものをやるやうに努力するが建築物をして十分耐震耐火の効果あらしむる爲に各人の奮起を望まざるを得ない。

木造建築と震災

京都高等工藝學校教授　工學士　本野精吾

最も酷かつた湘南方面

木材建築は震災に伴ふ火災に對して非常な弱點を有つて居るので、耐震家屋としても同時に殆ど價値なきことになる、從て將來の都市計畫に向つては木造建築は消滅するのであらうけれど、まだ、當分は色々の事情の下に存續するだらうと思ふ、それに就て私の考を少しばかり述べようと思ふ。

私は此度關東方面に參つて、東京に止ること三日間、それから湘南方面に參り鎌倉から横須賀と云ふやうに安井氏等と同じ行程を取て、箱根の強羅まで行つた、其間僅に四日であつた、而も各方面の土地の狀況を視たのであるから、無論觀察も十分ではないが、此間に木造家屋に接する機會は澤山あつたのである、それで地震の程度と云ふことに就いては專門的の御研究もあると思ふけれども、私が唯一寸瞥見した所では矢張り湘南方面が餘程ひどかつたやうに思はれる、鎌倉から横須賀方面では普通の家の殆ど八九分通りは倒潰して居る、或は全潰し、或は半潰して居ると云ふ狀態であつた、之を東京方面に於て山の手の木造家屋が大部分完全に殘つて居る狀況と比較して、餘程地震の狀態が違つて居つたのでないかと思ふ、實際其地方の震災に遭遇した人にどんな風に震動し、どんな風に倒れたかと云ふやうな其時の感じを聽いて見たけれども、是はもう殆ど誰も分らないと云ふ返答であつた、中には初め三尺も持上つたと云ふやうなことを言つて居た人もあるが、どう云ふ風に震動し、どう云ふ風に倒れたかと云ふやうな實際の狀況は人の感覺では分らなかつたやうである、それで私は木造家

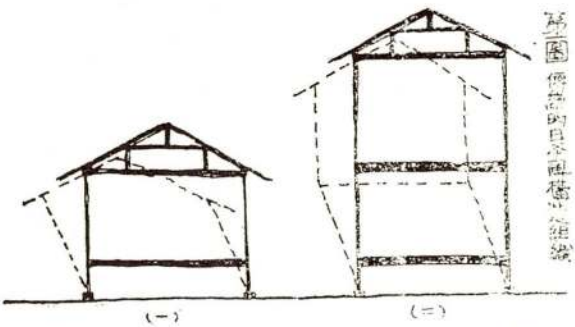
屋の倒れた時の狀態を知りたいと思つたけれども、遺憾ながら分らなかつた。

木材建築と耐震價値

是は大體のことであるが、先づ一應耐震建築としての木材建築のことを申上げると、先程申上げたやうに、震災に伴ふ火災に對しては殆ど抵抗力が無い爲に非常に價値が減る譯であるが、木材と云ふものゝ性質から考へると、かなり色々の種類の力に對して強い抵抗力を有つて居るので、其構成方法の如何に依ては地震に對して十分耐へ得るものが出來るのである、其事に就いては又後に詳しく申上げるりして、木材に於て非常に缺陷のあるのは腐ると云ふことである、是が此度の震災で木造建築の破壞した主なる原因である、破壞した木材建築を澤山見た中で、かなり重要な部分が腐朽して居なかつた建築物は殆ど無い、まだ建築して間も無い一年位のものでも柱の根元の所が腐つて居るのを見た、さう云ふ譯で木材建築の腐朽と云ふことは到底免れないものとしなければならぬ、さうすれば初は強い力を有つたものとして建てられても、短い年限の間に其耐震力は非常に減殺される、從て耐震價値と云ふものが無くなつて來る譯である。

此腐朽の原因に就いては色々あるやうであるが、主に木造建築の壁の部分を張る被覆材料に對する注意が足りない所から來るやうに思はれる、是も極く大雜把な結論であつて、是が正しい動かすことの出來ない結論であると云ふまでにはまだ十分の研究を要することゝ思ふが、此度纔に視て歩いた中で、例へば漆喰であるとか、不完全な煉瓦或は不完全な瓦のやうなものであるとか、さう云ふ比較的濕氣の通り易い、而も換氣の不十分であると云ふやうな材料を以て覆はれた木材は非常に疾く腐朽して居たやうである、寧ろ木で表面を張つたものゝ方が餘程腐朽に對しては有効であつたやうに思はれる、是は直接耐震の方には關係はないが、附加へて置く。

家屋倒壊の理論とその實際



第一圖　傳統的日本風構造の組織

次に地震に伴ふ火災に對しては防火力が零と言ふよりは、寧ろ火災を奬勵する方の立場にあるが、火災が震災に附物であると云ふ上は矢張りそれに對しても相當の防禦をしなければならぬ、歐羅巴に於ては隨分木材の防火　塗料と云ふものが研究されて居つて、殆ど木材建築には總てこれが塗られて居るのであるが、それ以で或程度までの防火は出來る譯である。

で、只今申述べるのは極く大體のことであつて、木材建築と云ふものを大摑みに考へて、どの位に分れるかと云ふやうなことから、それの一々に對するお話を致したいと思ふ。

日本に於て一番多數に建てられて居る木材建築は私がこゝに（圖解第一圖）（1）（2）傳統的日本風構造法として揭げて居るものであつて、是が目下日本の都市の大部分を構成して居る所の大小の純日本住宅に用ひられて居る構造である、大體はこゝに表はしたやうな骨組の形になつて居て縱の柱に橫の木を枘で以て差込んで、接ぎ合して行くやり方である。

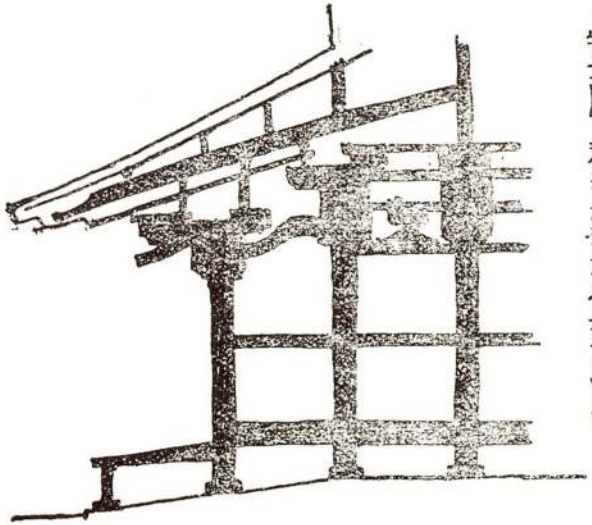
此方法はどう云ふ弱點を有つて居るか、結果から云ふと地震に對して非常に惡い性質を有つて居る、どう云ふ譯かと云ふと、橫の木を澤山差込む爲に枘の所で縱の柱が著しく細くなつて居る、殆ど半分位に削られて居る、從て此柱が元來十だけの力を有つて居るものとすれば、橫の木を澤山差込む爲に四とか五と云ふ風に其力が削られてしまふ、さう云ふ譯で橫の木のブツ突かつて居る所で縱の柱の耐力が著しく減殺される、是は普通一般に言はれて居

ることであるが、日本の建築には（日本建築ばかりではない）成べく壁を澤山付ける方が強い、それに非常に弱くなつて居る部分を壁に依て幾らか強めることが出來る、壁が澤山な家程倒れ難い結果になる、在來の日本風の建築が倒潰する狀態は、此度視た所では實際色々な工合に倒れて居る、中には全潰したのもある、全部倒れたものはどう云ふ道程、どんな順序で倒れたかと云ふことを想像することは困難であるが、半ば倒れ掛かつたもの、或は二階だけ倒れたものから、色々の理論等を結合して考へると、凡そ此點線で示したやうな方向に倒れたものである。（一圖解）所が實際は建物の倒れて居る又其上に屋根がブツ突かつて居るのが隨分ある、是は何處か非常な弱點があると、第一の上下動でグチャ〳〵になつてしまつたものと思はれる、又二階にても、斯う云ふ風に（二圖解）曲つて、こちらの方に二階が其儘落ちて其の儘立つて居る例が二三あつた、併しながら何れにしても二階建に於ては此處の部分（イ圖解）に弱點があつて、此所から折れると云ふことは今度の震災のみならず、從前の震災に依つて明になつて居る、尚ほ屋根の部分は三角形に構成されて居るが、大抵の家は殆ど原形を存して居る、餘程ひどいのになると、中には屋根から先に潰れたのもある、が、それは殆ど例外である、實際助かつた人の話では、鎌倉邊りでも家の中に居つた人は殆ど飛出す餘裕が無かつたやうである、所が大多數の人が助つて居るのは、其屋根の三角形の所から這出すことが出來た、不幸にして柱とか其他のものにブツ突かつた人が死んだと云ふ結果になつたと聽いて居る、是は實際に調査した所と照し合つて一致して居るのである、此在來の木材建築法が今後どれだけの生命を保つかと云ふことは疑問であつて、恐らく長い時期ではなからうと思ふて居るが是が若し存續するとすれば、之を何等かの方法で改良しなければならぬ、それには色々の手段があらうが、先づ大體に金物を使つて、柱と交叉して居る此接目を強くすることが必要である、成べく金物を使つて、枘を減すと云ふ手段を執るとか或は筋かいのものを使ふと云ふやうな方法でも講じたならば、幾らか在來の日本建築法を強うすることにならうと思ふ。

古社寺建築の耐震價値

次に矢張り日本の傳統的建築物の一分野として社寺建築のお話をしやう、是は特に鎌倉に於て其例を多く見たので、將來の都市建築に向つては餘り關係の無いものである、將來日本の大都市の中に木造の社寺建築が續々出來ると云ふやうなことは殆ど想像も付かぬことだらうと思ふ、是は先づ目下の實際問題としては餘り關係の無いことであるが、在來の日本建築の構造法の一分野としてお話をするそれは同じく斯う云ふ風な(圖解第二圖)傳統的の構造であるが。

社寺建築が餘程強い耐力を有つて居ると云ふことは今度の震災で證明されて居る、實際の結果を見ると、鎌倉は殆ど半分々々であつて、私の見た範圍では全部壞れたのが圓覺寺の舍利殿と、八幡の拜殿及び樓門で、完全に殘つたのは圓覺寺の山門——詳しく觀たならば、何處が壞れて居るかも知れぬが一寸見た所では完全である、それと八幡の本殿で、其他半壞或は傾斜したものは多くあつたやうに思ふ、斯う云ふ結果であるが、どうしてあと可なり強い地震に耐へたかと云ふことを一寸お話すると、第一は柱其他のものが非常に太い材料を使つてある、それが爲に總ての部分が強く結合されて居ると云ふことが一つの原因である、又社寺建築は一般に『プラン』が規則正しく出來て居て、整然とした平面を有つて居る、是も地震に對して有利な條件である、もう一つ主な事柄は、太



第二圖　社寺建築構造組織

い柱の上の所が非常に大きな組物を以て其上の屋根に關係を有つて居る、其處が大變巧な構造法であつて、是は建築の一部分の軒の所の柱の上に横の木を渡して、其處の上に庇を支へた所の圖である、此處（ロ圖解）はどうなつて居るかと云ふと、柱の上の組物の所に更に太い木を渡して、此點で以て上の目方と、屋根の内部の目方との平均を取つて居る、そして此處の柱の内部の方へ結び付けて、軒の非常に出た所の目方を柱で平均して、巧みにバランスを取るやうに出來て居る、さう云ふ點に於て大變巧く出來て居るのと、横に非常に太い貫が渡つて居るのが非常に有利な條件を備へて居る、尚ほ社寺建築の有利な點は、其構造方法の極く緩かな點である、之に向つて柔構造法と云ふ名を附けられて居るが、此斗組の所などは僅に切り欠いて上へ〳〵と積み重ね、そして其上に組物が重つて屋根を支へて居ると云ふ形になつて居る、從て絶對に柔い方の構造法である、構造を非常に丈夫にして、全體を一つのものとして緊結するか或は日本の社寺建築の如き自由構造法にするか、どちらかにするのが地震に對して非常に有利である、さう云ふ點に於て此度も社寺建築は大變好い結果を示して居る、五重の塔の如きも此有利な柔構造法を下から上まで一貫して出來て居る譯である、鎌倉に於ても同じ圓覺寺の中で舍利殿は倒れ、山門は完全に殘つて居ると云ふやうな現狀になつて居るが、舍利殿の方は地震に對して非常に不利な構造法を有つて居つたやうに思はれる、之に反して山門の方は非常に有利な形を持つて居た、斯んなことは餘り細かくなるから社寺建築のことは是だけにして置く。

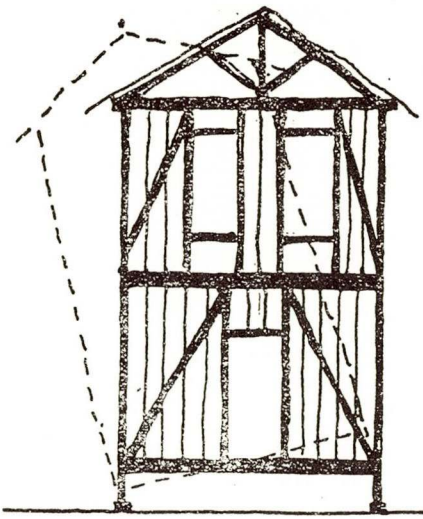
歐風構造と耐震價値

以上は日本の傳統的構造法に就いてであるが、次に第三に種類として歐風構造法の話に移る。

歐風構造法の一つの種類として、日本に最も多く行はれて居るものは、斯う云ふ（方第三圖圖解）構造法である。

縦の柱と筋違及間柱を以てする方法で、全體の壁が殆ど一つのシッカリした圍

第三圖　普通洋風構造組織



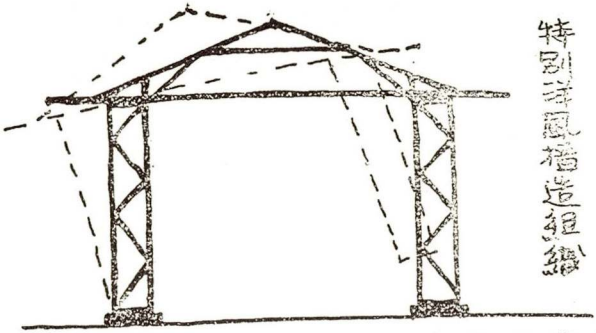
體に形成されて居る、從て地震に對しては非常に有利な條件を備へて居る、所が鎌倉に於ける實例を見ると、近來建つた此種の構造法を以てした洋館が殆ど全部壞れて居る。中には半壞のものも澤山あつた、是は何に因するかと云ふと、それは非常に粗雜な建て方がしてあつたと云ふことが原因である壞れたものを見ると能く分る、外の種類の煉瓦或は鐵筋コンクリートのやうなものであると、壞れた結果から、果して粗製であつたかと云ふ風な、出來方の根底にまで立入つて、判斷を下すことは可なり困難であるが、木材建築では、其壞はれた狀態を見れば、これが粗製であつたか、どうかと云ふことが非常に能く分る、鎌倉の例は餘程粗製なものが多うかつたやうに思はれる、尙ほ鎌倉に於ても此種の木材建築にして完全に殘つた例がある、少し小高い所に建つて居つたもので實際見るだけの餘裕を得なかつたが　非常に注意して建てられた家だと云ふことが明になつて居る、此第三種の建造物も木材である以上將來の大都市內部に於ける建築としては追々其跡を絶つであらうが、郊外住宅或は都市より遠く離れた土地に於ける建物の構造方法としては別に惡いものではないので、是は今後も永く存續することゝ思ふ、唯此種の建物として注意を要する點は先程申した木材の骨組の腐朽に對する注意である、それは外側の壁を覆ふ所の材料の選擇及び其方法が一番重大なことかと思はれる木材建築に於ては屋根から來る雨、等上から來る水分に對しては隨分注意を拂はれて居るが、壁から來る水分に對する注意が比較的怠られて居るやうに思ふ、是は今後盛々研究を要する事柄であらうと思は

れる、是が先づ洋風木材建築の最も大部分を占めた構造方法であつて、是れが倒れる場合にはどうなるかと云ふことは實例に甚だ乏しいのであつて、恐らく斯の種の建てものにして嚴重に建てられて居つたならば、倒れないだらうと思ふ、實際倒れて居つた例はさう澤山無いやうであつて、其壞れたのを見ると、倒潰に狀態系統が甚だ區々である、それから想像すると、それ等の建築は恐らく其弱點を有つて居つた部分が原因となつて、色々狀態に壞れたものだらうと思ふ、で、想像するに、此點線を以て示した樣に(ハ)倒潰する場合には一つのものとなつて倒れるであらう、

鐵材の構造方法を應用したる木造建築

更にもう一つ木材建築に於ける一種の分野がある、是はまだ日本に於ては甚だ實例が乏しいのであるが、斷面積の比較的小さな、そして同じ大きさの木を澤山に合してそれを恰度鐵材を組合せるやうな工合に、釘或は『ボールト』を以て締め付けて、力の澤山當る所の材料を何本も合して、鐵材の構造方法を木材に應用する遣方である、此構造方法は歐米、殊に獨逸及び亞米利加で一番多く行はれて居るやうであるが、中にもどう云ふ理由か分らぬが、最近獨逸に於て著しく斯種の木材建築の研究が進み、又實際に半永久的の工場建築などに此種の骨組が盛に使はれて居るやうである、從て非常に宏大な建築物を此木材構造法で以てやつて居るのがある、何故に此木材建築が流行つて來たかと云ふ原因は分らぬが、兎に角非常な勢で研究されて居ることだけは確である、其理論の根柢は何處にあるかと云ふと鐵材の如く木材の力を使ふ、又釘或は『ボールト』の裁斷力、即ち横に切れる所の『シャー』を使ふ、次に木材の耐壓耐伸の力を使ふ、鐵板の位置に木の板を使つて、鐵の『リヴエット』の位置に當る所に釘を使つて、鐵材と同じ形に構成して居るのがある、さう云ふ風にして、此組織は色々の人に依て研究され、色々の形式があるが、兎に角大體の理窟は今申したやうな木材の力と鐵材の力との全成で、木材の力と鐵材の力を甚だ合理的に活用したものである、從て材料の節約にもなり、又交叉する場合に在來の日本

建築の如く柱に穴を穿けて、木材の力を減殺すると云ふことなしに、木材を其儘使ふのであるから、從て在來の日本建築の如く木材の力を減殺することなしに使はれる、併し實は私が日本で見た此種建築物の例は甚だ僅少であつて、先年大正博の時の建物が一部分此方法で構成されたのを見た、其外にもソウ澤山なからうと思ふが、私の實際見た例は甚だ貧弱である、所が幸に此度の震災地の中に一つ此例を發見することが出來た、それは箱根の强羅にある別莊建築であり、米國のライト氏の設計になつたものであるが、それが米國流の建て方であつたのか、其處へ行つて見ると、恰度半分壞れて居て、それが爲に此種の構造法と破壞の狀態とを能く見ることが出來た次第である、其事を一寸お話して此話を結ぼうと思ふ。



第四圖
特別洋風構造組織

こゝに揭げたものがそれで、其構成方法の原理、原則である（圖解第四圖）斯う云ふ風に同じ大きな用材を組合せて造るので、木と木の結合の所を釘づけにしてある、一見した所では、甚だ粗雜な骨組で、一時的の博覽會の建物のやうな外觀を有つて居るけれども、實際は餘程强い力に耐へたと云ふ結果を示して居る、强羅は元來被害が比較的少いと云ふことを聞いて居たが、實際行つて見ると、隨分壞れて居た、建造物の形は立つて居つても、大抵は何處か知らぬ傷んで居ると云ふやうな狀態である、普通一般の建物のことは略して、此特種の建物に付てお話するが、此構造方法でやつと强羅の建物は山の崖の角に立つて居つたので、一部分は平な所にあつて、主な大部分が崖の所へ乘り懸つて居た、所が此崖が地震の爲に崩れたので、此主な部分が半分潰れて、下に落ちて居た、從て其主な部分と平な所の部分の所で家が二つに裂

けて、半分は倒れかゝつて、半分は倒れて居た、其倒れた狀態を調べて見ると、日本の在來の建造物が滅茶々々に壞れて居るやうな狀態にならないで、其骨組全體が赤線で示したやうな狀態に原形を保つた儘傾いて居る、倒れる場合には固より原形を保つた儘根元が持上るやうな狀態で、各其部分がシッカリ結合されて居つたと云ふことは、それに依つて證明される譯である、(二)是は極く低い家であつて、從て輕い、使つてある材料も極く細いもので、それに三寸位の釘を要所々々に打つてあるだけである、一見した所では非常に弱々しいのであるが、實際は寧ろ普通の此種の粗雜な建物よりは餘程丈夫な結果を示して居た、併し兎に角材料としても鐵の釘、或は『ボールト』を使つて、其力に便るのであるから、前述の通り腐朽と云ふことに對する注意を怠つたならば、矢張り短い間に耐力は非常に減殺される、此種の建物に付ても十分腐朽に對する注意をすることが必要だらうと思ふ、箱根の例に依つても、是はまだ建つてから一年ばかりの建物であつたが、柱の根元が腐つて居つたのを發見した、又此の種の建物は一本の釘も重要な使命を持つ譯であるから釘の配置打方等には大に注意を要する。

是で大體木材建築のお話を終つたのであるが、今まで述べた所を一括して申上げると、木造建築と云ふものは其構成方法に依ては十分な耐震力を持たせることが出來る、併しながら其腐朽に對する注意を怠つたならば、比較的短い生命を保つて、耐震力は無くなると云ふ結果になる、又火災に對しては塗料に依り或程度の抵抗力を增すより外に方法はない、結局する所木材建築は都市の如き大集團の生活に對しては甚だ權威の少いものと云ふ結論になる。

芋かこふ砂場選びぬ草紅葉

破壞されたる帝都と其復興（再び）

文學士　黑田鵬心

一

隅田川を初めとし、東京市には、城濠、運河、堀割など少くないが、これも整理する必要がある。或ものは幅員を擴げ、或るものは之れを埋め、又新たに開設する必要もあらう。陸の道路に對して水路であるから、成るべく組織立てゝ系統を設けなければならぬ。運輸の爲めにも、又防火の爲めにもさうする必要がある。幅員は或る程度迄の廣さがなければ、防火の役に立たない事が今回の火災でわかつた。而して防火の爲めには、相當の幅員を有すると同時に、兩岸——少くとも一方の岸——に添ふた道路が必要である。それは美觀の上にも役立つし、場合によつては細長の公園とすべきである。隅田川岸の如きは一部分は細長の公園として貰ひたい。

次に河川、堀割などに架する橋の問題であるが、これも鐵筋混凝土構造として、燒け落ちる事を防ぐべきであるが、その上に幅員にも注意せねばならぬ。今回でも幅員が狹かつた爲めに、混雜して困難し或は不幸燒死した人も多かつたらしい。吳服橋、鍛冶橋など日本橋區の人が丸の內へ避難するとしては幅員が狹かつた。道路ならば幾條もあるから甲の路が駄目なら乙の路へ移る事も出來るが、橋梁ではさう行かない。

近頃の橋梁は美觀については相當に注意が拂はれてゐるやうである。十三年前に日本橋が開橋した時に、日本橋の美的價値が問題となつたが、其の後に出來た吳服橋や靈岸橋や一石橋などからみると日本

橋は幼稚なものであつた、更らに其の以前に出來た新橋などは全く粗末なものである。

隅田川に架した五大橋などもつと幅員を增し美觀も高めて貰ひたい。數も一二增加する必要があらう。

二

都市に商業、工業、住宅、官衙、遊樂等の地域を定める事は、都市計畫の一要項で、既に既發し法令にもあるが、東京市に於いては今回の破壞で、新規にやゝ理想的に之れを實現する事が出來る。

丸の內附近を官衙の區域とし、新設の議院邊を中心とし、陸軍省、司法省、海軍省、外務省あたりを纏めて、之の附近に今日燒失した文部、大藏、內務、農商務、鐵道等の各省を纏める事が出來やう。

東京驛前は丸ビル、郵船ビル、東京海上、三菱銀行、同商事會社　興業銀行、工業俱樂部、臺灣銀行朝鮮銀行、安田銀行等既にビジネスセンターを形成してゐる。而して中央に宮城があり、前記官衙地域區と合せて帝都の中心を作るものである。

それから東方、日本橋、京橋、神田の三區と、芝及び下谷の半部を商業地域とし、江東本所深川兩區を工業地域とし、芝及び下谷の半部と、麴町（此の一部は帝都の中心地として宮城、官衙、ビジネスクオーター等に取られてゐる）の一部、麻布、赤坂、日比谷、牛込、小石川、本鄉等を住宅地域とする。尤も住宅地域の中に小商業地域の混合するのは止を得ない。

斯の如く地域を設定し、中心地は勿論、商業地域には耐震耐火構造の建築のみを許し、工業地域に於いても工場は耐震耐火建築に限るべきである。工場地域內と雖も、小商店や小住宅などを含むのは止を得ないが、小商店は街路に面して並ぶ事になるだらうし、小住宅も成るべく密集して、一劃をなす樣にさうして、工場は大小とも一劃をなす樣にしたい。即ち工場地域內にも又商店や住宅の小區域を作る事

にしたいのである。それと同時に住宅地域内の商店は、商店丈け密集して小商業區域を作り、住宅地域の特別を明かにしたい。

三

都市に十分な公園を必要とする事は、從來も公園專門家によつて屢々叫ばれたが、之れを顧みる人は比較的尠かつた。或は之れを專門家の我田引水論のやうに考へ、それ程の必要を感じなかつた人もあるやうであるが、今度は明かに其の必要である事が證據立てられた。深川の岩崎男の淸澄園へ被難した人が助かつた事や、白柳原の杉浦伯の蓬萊園が防火に役立つた事、その他上野や芝や日比谷公園などが、防火、被難に役立つた事は、若しそれ等が無かつたとしたならば、どんなに慘害を增したかと考へてみれば明瞭である。從つて今回の地震火災以後は、異口同音に公園及び廣場の必要が唱へられ之れが擴張增設の必要が說かれてゐる。さうして東京市全廣の十分の一を之れに充てる計劃であるらしい。これは誠に尤な事で、私は庭園協會に關係する者として殊に本懷とする者であるが、之れが實現には十分の注意を要する。

公園が必要であるからと云つて、唯擴張したり增設する丈けではいけない。豫め配置を考へ、聯絡をとり、統一をつけ、所謂公園系統を樹立する事が根本問題である。

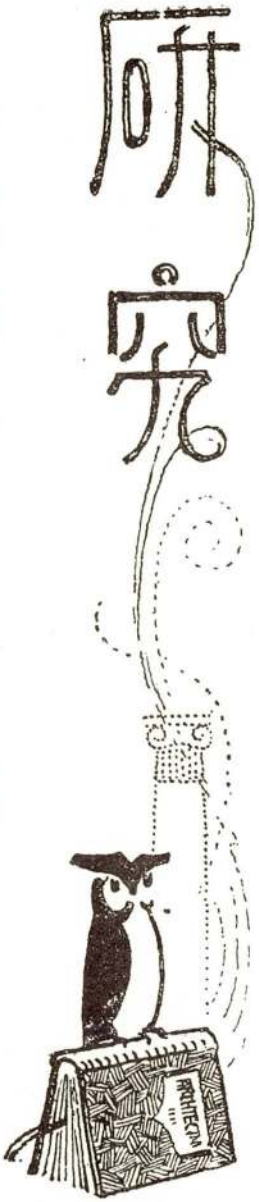
試みに之れに對する私案を述ぶれば、先づ既設の日比谷公園を中心とし、之れに二重橋外の廣場を加へ(其の間の濠の一部を埋めて結合する、石垣は成るべくその儘殘したい)之れを中央公園とし、上野公園を北部の大公園、芝公園を南部の大公園、明治神宮外苑を西の大公園とし、東には隅田川岸に細長の公園を作り、被服廠跡を江東の大公園とする。猶濱離宮を臨海公園とし、阪本公園、湯島公園、淸水公園を擴張し、士官學校、戶山原、猿江御料地、白金、月島南端等に公園を新設する。さうして主なる公園

は聯絡道路によつて結びつける。それは少くとも幅員三十間の道路で、左右兩側の歩道の外、中央に遊歩道を作り、並樹を二重に植え、其の間を通つて、甲の公園から乙の公園へ、宛も公園中を歩くやうな感じで行けるやうにするのである。即ち日比谷公園から北はお茶の水公園（湯島公園を擴張して改稱する）を經て上野公園に至り、東は濱離宮に達し、南は芝公園を經て白金公園に及び、西は清水谷公園を經て明治神宮外苑に達せしむる。猶出來得べくんば、上野公園から淺草公園を經て隅田川を渡り、對岸に沿うて北は向島に至り、南は安田公園から東に折れて被服廠跡の公園に入り、南下して猿江公園を過ぎ、更らに海岸まで道路を延長して、西岸に沿うて細長公園を作り、新大橋に至らしめる。斯くの如くにして十分の一を公園敷地を當て、縦横に聯絡道路を作れば、平素の衛生、行樂に資し、一旦火災に際しては防火線路となり、又避難所としても十分役立つのである。殊に公園聯絡道路は、火災中と雖も並木の間を疾走する事が出來るので災害を防ぎ得るのである。

四

聞く所に依れば、復興院は先づ都市計劃の大綱を確定、發表するさうであるが、或は本誌が發行される頃は、既に其の後となるかもしれないが、如何なる程度まで私の考と一致するかを見るのも興味がある事と思ふ。私は既に本誌の火災防止號にも公園と公園聯絡道路の必要及び耐火的の建築に就いて述べて置いたが、その時は斯かる大火が起らうとは夢にも思はなかつた。今回のは地震の後に火災が起つたので、全く想像しなかつた程の大災害を生じたが、此の爲めに都市計劃が多少理想的に發表せられ、市街建築物法も改正せられ、徹底的に之れを實現したならば前よりも立派な帝都が出現し、復興の實は十分擧げられる事と信ずる。さうして其の時期は遲くも十年後、即ち一九三三年頃であらうと思ふ。

（大正十二年十月十九日於東京青山）



關東大震災より得たる教訓と將來の災害防止の研究

神戸高等工業學校教授
兼東京美術學校教授
古宇田實

（本文は筆者にて訂正追加を要するものありしが、時間の容さざりしためその儘掲載せり）
—編輯者—

去る九月一日の關東地方の大震災が安政以來の劇烈なものであつたことや、世界稀に見る大慘狀を惹起したこと抔は今更云ふまでもない、而して是に對し將來の豫防法や、都市計畫法の意見が既に多數の建築家、夫々の專門家によつて唱へられて居るが、要するに其意見も議論も殆んど一致して居る、そして別段新說も珍しき方法も聞かれないが、これは震災の調査材料が未だ充分纏つて居らぬことにもよるが、また一面既に過去十數年來危險若しくは改良を唱へられて居たことが、一大實驗に供せられて結局改良の實行の有無に歸するので、そこに大なる敎訓のあることを示すものである、自分も程度は輕少ながら罹災者の一人として且つ震害火災の跡を見て、如何に天の敎訓の大に

して覿面であるかに驚いた。

今回の震災に於て破壊された建築物は、設計の不完全、工事の粗末であつたと鑑定さるゝ鐵筋コンクリート構造、鐵骨煉瓦構造を始めとして煉瓦造、石造の大部分、古くなつた日本家で、まさか今頃こんな大地震は起りはすまいとの些かなる油斷から來た結果のものが少くない、もとより其結果は將來の改良に資し大なる教訓となることは勿論である、而して東京、横濱に於ては地震直接の災よりもそれから起つた火事によりて慘狀を呈した方が多い事も事實であるから假に今回の地震がなかつたとしても或る外國と戰爭を開く事が萬々ないとも限らぬので其際は忽ち空中より爆彈を投されると、其結果第一に水道の水源地、交通機關官衙、銀行、其他の大建築は其目標となり、破壊されるので今回の震災と餘程類似の結果を來すことと明である、建築家の多數は既に其危險災害の大なるべきを屢々豫言して居る筈だ　長岡中將が飛行機宣傳にまたこの危險を說き廻つたのも數年前の話だ、そして戰爭に依る災害後は今回の樣に外國は愚か地方の同情も受け難い事情となるから一層困難を來すわけで、これを地震地帶の有無に關せず、誰れの頭にも來る問題である。つまり關東地方の震災は其實例を示す爲に地下から爆彈を投り揚げられた樣なものだ、されば今後近き數年には大劇震は起らぬとしても、外國との戰爭はいつぞこで澎發するか分らぬのであるから、其時は東京は勿論、大阪、京都、神戸等の大都市は皆其慘劇を繰返へさぬとも限らぬ、そこでこれが豫防方法を講ずることは獨り東京、横濱、横須賀地方に限らず急務であると云はねばならぬ。

地震に對しては地行、柱梁等の構造に注意を要する樣に爆彈に對しては屋上と床の堅固を當面の必要條件とするか、それよりも向ほ恐るべき火災に對しては殆んと同じ注意を要する。東京市の復興が大々的計畫のもとに特にこれが豫防法を講ずると聞くが、隻手を擧げて欣ぶ次第である。言に兼て唱へられて居る都市計畫に絶好の機會を與へて呉れたもので、犧牲としてはあまり大きく、慘に過ぎては居るが、それ丈大且つ深き教訓に依て

改良を促した天の指圖である、故に此機會を失ふたり、姑息の復舊を行ふたならば、鐵道が狹軌で不便を感じ、水道の配給が不足で不便を來してゐる以上再び取返しのつかぬ大失敗を來す恐れがあると考へるのである。

若し地震から起る災害の度を少くしようと思へば、これが豫報に過ぐるものはないこと勿論である、當局もそれを承知して居ればこそ、かなり古くから文部省内に斯道の學者を集めて成れる震災豫防調査會を造つて、色々の研究も行ひ報告も出し調査も重ねて居る、或る時は大金を投じて東京帝國大學の構内に大きな井戸を堀つて地震計を据付て其豫報を企てたこともある、それで豫告は理論上からは或る程度まで知れる樣になつて居る筈であるが、實際には今回の樣に不可能で、其豫防調査會を含んで居る文部省すら、大災害を受けてしまひ、大學も半分を失ふた樣だ、今日の學問の程度では豫報はまだ無理と云はねばならぬ。然らば大地震があつてもこれに耐へ得らるゝ建築物を造ること、及び火事が起つても燒かれぬもの、都市に於ては早くこれを消し止め延燒を防ぐ工夫の方が寧ろ大切であると云はねばならぬ。

昔は文明的設備に缺けて居つたから安政二年の江戸の大地震に大慘害を來たしたと考へられて居た、今日其文明的設備が却て慘害を助けたり、或は少くも間接に災害を大ならしめたものもあり、爲に今の世に有り得べからざる程度の悲慘な狀況を呈したので誰れが震災前にそれを想像しやう、今でもうその樣に思はるゝ眞事實である、

何故と申すに第一地震と共に水道は全然破壞されて、切角此の水道を基として立てた消火設備は何にもならぬ、水道があるからと云ふて衞生上、邪魔扱にさるゝ井戸は多く埋められて居るから數の少い消火ポンプの用にも水が足らぬ、故に火焰は風のまに〳〵勝手次第に嘗め盡して行く、その上避難者も、罹災から免れた人も忽ち飲料水に困る非常な苦しみをなすと云ふ樣で此の例は單に日本丈ではない電燈瓦斯の文明設備も忽ち破壞されて其夜からは暗黑世界となり、炊事も困難を來したはまだよいが、線の切斷等の爲に忽ち漏電し、

瓦斯の爆發の爲に更に火災を大にし道路には架線がぬた打ちて、避難者の歩行を阻み、アスファルトの道路は熔けて通行を止め、倒れて燒死したものさへある、また木煉瓦の道路は燒けて、怪我を大きくして居る樣、生ながらの焦熱地獄を現出して居ると云へる。

然らばこれ等文明等設備は將來の都市にも害を釀すや否やは大なる研究問題で、要するにそれを安全に利用出來る樣、都市計畫によりて訂正すれば良い。

斯くて自分の實見と、多數の建築家の實見談を綜合して見ると將來の建築に際して採るべき方針と少くも研究すべき點がわかる、簡單に其主要なるものを擧げて見ると

將來の建築に用ゆべき建築構造と材料

(一)鐵筋コンクリート又は鐵骨に鐵筋コンクリートを包みたる耐震耐火構造

市街地建築物特に防火區域内に建つべき官衙、公共建築、商業上の建築には絶對に此耐火耐震の構造を用ゐ、正確なる計算のもとに、正直なる施工を行ふべきである、此種のものが、安全であつたことは今回明に證明されて居る

(二)高さは成べく五階以上を禁ずる事

鐵筋コンクリート、鐵骨を以てすれば耐震、耐火構造が不可能でないことは明で、現に辛き地震の經驗を有する桑港に於て今尙盛に以上の高層建築を建てつゝあり將來に於ても、築造されべく進行しつゝあるを見ても當然さしつかへなき樣なものではあるが、劇震に際し多くの場合エレベーターは中途停止し或は用を爲さぬものと考へねばならぬから、自然階段を重なる道となすが故にそこに多數の人が集まり大なる危險を伴ふ原因となる、自分は日本人の體質、疲勞程度から考へて五階以上を無理と考へるので茲に特種のもの以外は高さを制限し一樣にして一は市街の體裁を整ふるがよいと考へる。

(三)完全なる防火を期する爲に各階の窓及外部の出入口に鐵の防火戸を取付け障子は鐵格子と

なすこと

これは道路の幅員や周圍の建築物の性質によりて斯る絶對的のものにせずともよいが、若し其建物が猛火に包まるべき恐れのある處に建てらるゝなれば是非必要とする設備である、日本橋で燒殘つて住友銀行の內部に居殘つた人の談だと云ふを聞いたが完全に閉されたシャッターの下の僅かな隙からも火の子、熱煙を吹き込み、又シャッターの裏側のペンキを燒いたこと抔から考へても、シャッターがあつても裏に木格子、窓障子や木製唐戶であれば燃燒の恐れがある況んやシャッターのなきものは到底猛火に耐へられぬ、併も其シャッターは多くの例で捲き下げ困難または不可能となり、其用をなさなかつたものだ、幸にして捲き下がつた階下のシャッターは避難者の家財に火が移つた爲に燒けてシャッターに寄りかゝり熱と重量で屈がり全く不用に歸したものが少くない、故に體裁は惡いが折疊式の鐵の扉を以て安全とする

(四)壁體中に筋違を入るゝこと

鐵骨コンクリート、鐵骨、木造を論せず、破潰の程度は筋違の有無、强弱に原因して居ることは破壞の跡、龜裂の形を見て明に判る、或るものを態々入れたかと思はるゝ位に明瞭に張瓦を剝落し、或は龜裂を示して居る、倒潰した日本家抔が多く此の缺點に原因して居るのも論ずるまでもない

(五)ブランの形にも多少關係を有す

一のブロックに成るものよりも口形又は□形等のものは割合安全であつた、故に中庭のあるものは比較的耐震性を持つと考へらる。

(六)木造家屋の屋根制限勵行

木造家屋も倒潰せるものは論ずるに足らぬが、地震で耐へて火事に燒失したものは多く屋根から火を移して居るものが多い、倒潰せるものも屋根の和小屋なると重量に原因して居るものと思はるゝ點から考へて、屋根は西洋小屋とし從來の日本風瓦なれば引掛桟瓦を用ゆるか必ず銅線銅釘等を以て屋根に固定し、然らざればスレート、アスベスト又は專賣瓦、或は鑛物性の輕

く葺き易き材料に限る制限を加ふべきである。

(七)木造建築の改良

火には燃ゆるが耐震として木造建築必ずしも弱からざるとこを示して居る、されば、郊外地或は一部の住宅地には、經濟上木造が盛に出來るものと想像するに難くない、そしてそれが構造に改良を加へ別に防火方法を取つたならば住宅建築として適當のものを得られると信ずるのである。

これを要するに、別段新しき方法を採るのではない、既に從來研究されて居る結果が、今回の災害によりて實證されたので、正直に良き方法として知られて居たものを用ゆれば安全と云ふに過ぎぬ然し咽喉元過ぎれば暑さを忘るゝが人情であるから、數年の後再び平穩無事に馴れて此災害を反復せぬことを吾れ人共心懸くべきであるされば左の如き構造は絕對若しくはつとめて避けて置いた方が安全である

(一)鐵骨構造に於ても鐵材を露出せぬこと

小屋の鐵骨構造は別として床や柱の鐵骨が火の爲に飴の樣に屈曲して、あとで片付けるにさへ非常なる困難を生じた例は今回の丸善建築を始めとして澤山にある、巴里の有名なる百貨商店ブランタンや桑港の震災にも見た例で、成べく鐵筋コンクリート等を以て包んだ方が堅固で且つ安全である。

(二)煉瓦や石材の建築は壁厚が非常に厚からざる限り大に危險である

東京市内山手邊の貧弱なる日本屋が倒れずに殘れる所でさへ石塀、煉瓦塀は殆んど倒潰し、煉瓦、石造の洋館及倉庫の滿足に殘れるもの亦甚だ稀れで、其壞れ方が他に比し殊に劇甚である東京帝大の鐵筋コンクリートの新築教室が硝子一枚破れて居らぬに反し工學部の本館は其切妻（グーブル）は勿論到る處甚大なる破損を來し差當り使ひ道にならぬ程の危險狀態を呈して居る、また法文科圖書館等大學建築の約三分の一を燒いたのも多く煉瓦か妻切の崩落から火を呼んで居ることに鑑み、煉瓦、石造の甚だ危險なることは明瞭である、反之東京驛、銀行集會所、橫濱正金銀

行の如き異例もあるからこれ亦大に研究を要するが、これ等は何れも鐵棒帶鐵を煉瓦の間に入れ、壁厚亦頗る厚く、極て注意せる施工であつた事も參考すべきである。

(三)舊來の土藏造を廢すること

横濱に於ては勿論東京の火災地に於ては舊來の土藏は殆んど全滅し、山手でも多くは大破を來して居る、故に此方面にも火災があつたならば無論燒失した事は明である、斯くて安全と思ひ家財を納められた罹災者も全く財産全部を燒失して裸一貫となつたものが少くない。これを最初の震動に際し鉢巻を振り落し屋根瓦と土を滑らかし、忽ち火を受けて一たまりもなく灰となつたので、これに代ゆるものは今の處鐵筋コンクリート造を以て最も適當とす。

(四)舊來の建築方法に依る三階以上の木造日本屋を禁ずること

鎌倉横須賀方面に於ては二階以上は殆んど全部倒れ二階建は階下を潰し階上が地上に腰をついて居る風である、東京に於ても地盤の惡い所では二階建の町家がまた多數に倒れて居る、然しこれは寧ろ當然の結果で、不合理なる構造と、粗雜なる施工に原因して居る、鎌倉でも通柱の多い二階建が倒壞の厄を免れて居ることから考へると管柱でもそれを上下に重ね、金物を以て締付け方材等を用ゐて補強して置けば危險が少いことになる。

(五)張間の大なるものに和小屋は絶對に禁ずること

これは論ずるまでもないので張間狹くとも西洋小屋を用ゆべきである。

其他にも禁ずべき構造、廢すべき材料は數々あるが、茲に最も疑問とし研究に價するものが、所謂近時流行の木造漆喰塗の所謂文化住宅である。乃ち舊來の木造和風建築を改良したものと何れが良いかと云ふ問題である、元より徹底的に鐵筋コンクリートを用ゐたものは別で、茲に疑問とするのは木造に木摺や鐵網を張つて漆喰塗或はタイル張とした、洋風の建築を指すのであるが、其木材の構造、屋根葺材の輕快なることはこれを舊來

の和風の建築に比して優ること數等であつても、壁が今回の地震によりてより多く剝がれ、破れたる例を見る準耐火構造として推奬された木摺又は鐵網漆喰塗が十年も立たぬ内に腐れて地震なくとも兩三年の後には落ちなんとして居て頂度此際殆んど振ひ落されて遺憾なく内部の缺點を暴露したとすればそこに大なる疑問が出來る、即ちそれと比べて寧ろ在來の眞壁の方が保存率が多い樣に見ゆると云ふことも少くも研究せねばならぬことである、プランの如きは和風建築でもどうにでも出來る、そして防火の程度には大した差はない上に構造が疑問とさるゝとしたならば、震災地復興の爲に鐵筋及コンクリート材の不足を來し且つは其價格の廉ならざる時に當つて鐵筋コンクリートを奬勵しても仲々行渡らぬに際しそれよりも當面の急として木造が使はるゝは當然の運命を以て居る乃ち日本建築が自然、行はることは明である、またそれが適當の方法であらねばならぬ、茲に於て一層日本建築の改良を急とする屋根や小屋の改良柱や壁體の補强は更に進んで考究を必要とするが其趣味に於ては眞似ものゝ洋館に優ること數等で併も日本の濕氣多き風土に長き歷史を有する點に於て亦日本に適すること勿論である、而してこれが防火の一策として、樹木を配せる庭園を設くべきことも論ずるまでない、此くて周圍に空地もあり防火樹木も植ゆれば强ち和洋建築だとて心配は入らぬことになる、家屋の建築に對しての研究問題はまだ〳〵澤山あるが併し失はれた都市の復興に就ては勿論一般大都市に於ても尙更此機に研究を重ぬべき大切なことは都市計畫である。

日本の都市には近代の設備を施こせる都市らしきものは一つもない、内務省が都市計畫を企てたのも其理由からで、比較的大々的に其改良を斷行せんと進んでは居るが、それでもなか〳〵情實にからまれて思ふ樣に行かぬと聞いて居る、今回の復興に當ても有力なる一部には既に復興よりは復舊を先にすべしと云ふて居る人さへある位だが、完全なる都市計畫を實行する上に絶好の此機會を失ふ患があるから當局はそれで第二の災害を招く愚はせぬことゝ信ずるが、犧牲の多かつた此慘害

を善用して大に意義ある都市を造つて貰ひ度い。

然るにまた一方日本の都市計畫事業は中央地方共に、委員には技術的方面の人よりも政治家、理論家が多い爲めか兎角理屈にのみ傾き過ぐるとも聞く、其結果或一例を云へば市民の崇拜の目標物である古蹟も電車を眞直に通ずに邪魔であるからと云ふ理由丈で、名目は交運機關の整理と云ふ文明的名前で市民の反對は之を迷信として現場の實際は強て取拂はずとも出來る否寧ろ殘して置いた方が町の爲にも混雜の際の避難者に爲し得べき名所を取除くと云ふ風である。

吾人は都市計畫に際しては敢て西洋を眞似るではないが、計畫に研究を重ねて充分なる經驗を持つ英佛獨の如くに歷史的の舊地、名所となつて居る遺蹟は多少無理があつても、行路をよけ、線路を曲げ或は反てそこを小公園スクエアーに利用して、殘されんことを望むのである、またそこに都市計畫の設計の價値がある。

近代最も發展の著しき獨逸ヌルンベルヒの都市は舊城廓舊王城は勿論、町内の由緒ある古き家、寺院、記念建造物は總て殘して居る、併も其數あまりに多い爲か舊都市にはあまり手をつけず、反て電車線の數を限つて、寧ろ町を壞さぬことに務めて居る觀がある、そして郊外には新しき市街をどん〳〵增築し交通機關を整へ、益々發展を示して居る、此都市は獨逸に於ては勿論、歐羅巴にある最も畵趣に富む美しき町として有名で、獨人の誇りとされて居るが、併も商工業の都市としても獨逸内屈指のものである。

ライン河の沿岸にあるマンハイム市も亦獨逸は勿論世界に於て商工業地として有用の地位を占めて居る、其町は舊城廓の豪の跡を幅廣きアンラーゲンとして其内部を米國風の碁盤式市街を造つて居るがやはり、古き寺院時代のある町家は是を殘し保護をして居る、反之アンラーゲンの外側は驚く程發展を示して居る。フランクフルト亦然り、英佛の如き歷史物を非常に尊重する所は、別として獨逸の如き近代的設備、商工業の發展に全力を盡して居る國でもそうである、而して都市計畫はそこに眞の價値あり、味があるもので、昔の市區

改正の變體に終らぬことを常に禱て居る。

サー、クリストファー、レンは英國復興期の大建築家であるが、英京倫敦の大火後、倫敦の都市計畫を立てたが不幸にして實行されなかつた爲に今日の倫敦は、世界で最も不便な、分り難い大都市となつて後悔されて居る、吾人も時折、レンのタウンプランニングを見ては、今の倫敦がこうであつたならば、もう少しは便利であらうと嘆息した事屢々であつた、反之佛國巴里はナポレオンが思ひ切つて大膽なる計畫を行ふた爲に、今日では世界第一の美しき都市となり、都市計畫の手本の一とされて居る、獨逸のベルリン亦先帝の英斷にまつて、彼の美しき都市を見るに至つたのである。而してこれ等の都市の生命とする處は道路聯絡、形式と巾廣きこと、並樹道路の多きこと、河川を防火上に利用し兩側にあまり家を建てぬこと、要所に大なるスクエアーを設け、尙大公園を市の中央部若しくは一部に設けてあること等である、無論、住宅、商業、工業の地域は各區別して居る。

東京市の復興は半ば白紙になつたものに計畫を立つるのであるから、多少の情實、困難を排して茲に根本的に、然し温情味のある内容の供ふたものになることを希望する、既に色々の人から其プランの形式さへ唱へられて居る、卽ち宮城を中心とする圓圈式を良とし巴里を理想として居るかと思へば或は紐育の樣に碁盤式と云ふものもある。

實際に宮城が現在の位置に在ます以上それを中心として圓圈式都市計畫は、當然考へつく事で既に壕があり、それに沿ひて大通りが環り、また土堤も殘る以上、一部は既に其圓圈式を現して居る、然し實は巴里の如きあまり大きくない都市には圓圈も良い、其當時に於ける巴里としては最善の計畫であつたが、その式を其儘、東京の如き世界でも數番目と云ふ大都市に應用しては反て不便である吾人は宮城及東京驛を中心とした一帶附近には圓圈式を用ゐ、他は米國ワシントン市に於けるが如き、碁盤式に放射形道路を加へた、都市計畫を折衷して茲に東京市獨特の形式を案出さるゝが當然と思ふのである。

現在の宮城周圍の濠は反てそれを整理して防火

の補けとなしそれに沿ふた道路は並樹を植えて、ブルバーとし見附け、土堤と共に中央部、殊に宮城に對する防火地帶となし、平常は公園的逍遥道路にするが至當と信ず、土堤や見附が電車線や道路の防げとなればそこ丈切開くか、隧道とすればよい、此樣の例は獨佛英に於ては絶へずある例だ巴里の城廓、ヌルベルヒの城壁、ブレメンの濠と其周園は正に良き其例である。又神社佛閣の境内は寧ろ擴張して、スクエアー小公園とするがよい電車線に當れば線は往復の路を變へて其周周を廻はせば濟む　そこは立派な防火用或は避難所ともなり兼て市街の美觀を添へ得るもので、電車を通す利益抔とは比較にならぬ問題である　市内稍大なる公園を數ヶ所に設けることの良い事は論ずるまでもない。

大阪市も東京と似て、一層危險の患の多い處であるから此際やはり大に計畫を實行すべきである京都亦然り、神戸も同樣で只プランは前者はワシントンの如く後者は紐育のそれの如く爲すが理想であらう。

文明國の都市中日本程道路の惡い處はないとは一般に知られて居る事實である。此際、道路の改善は甚だ急務であるに是により交通機關の整理も出來る、而し東京程平面的に手を廣げ、立體的に低き都市も世界稀れであるそれが爲に、交通機關も行き屆かぬし、水道も充分に行渡らぬ結果を生ずるもので、大東京と云ふても實は其意義をなさぬものと考て居つた、されば今回人口も大に減少した機會に、これを中央部に引締める方法が良いと信ずる、即ち防火區域を絶對に耐火、耐震となすと共に經濟的に高さに延ばし、立體的に都市をコンソリデートすることを至當とす、これにより道路も水道も行屆ける築造も手入も出來、交通機關も整理出來ることゝ考へるのである、さすれば日々電車に鈴なりに群る人を減じ、老弱男女の取殘されて半日も待つと云ふ慘な態も見ずに濟むことゝ思ふ。只困難は因習的に個人が獨立に一箇の家を造らんとする希望が、大に市街建築の改革に邪魔になることであるが、それも資力のある人が、條例に準じて行ふなれば一向差つかへなく、資力

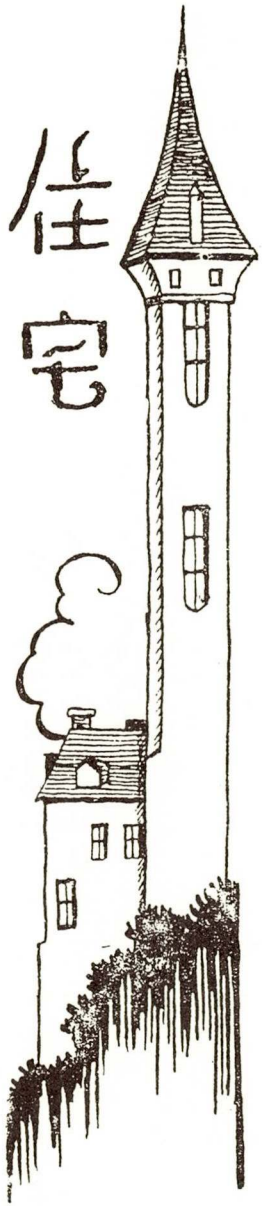
なきものは自然隣同士協力して茲にアパートメントに類するものを造るに至ることゝ信ずる、それ丈建築局は條例を嚴格に勵行すればこれ亦容易の事であると思ふが、復興院は無論これを斷行すべく以て、市街の舊面目を一新し眞に文明的都市を造ることであらう其竣工を待たれる。

反對に山手、若しくは所謂郊外地は自然住宅區域となることに疑を入れぬが、同時に當然、集團木造家屋は禁ぜらるゝことゝ思ふ、然も、全部がコンクリート家屋を以て住宅地を改むることも亦頗る困難で、自然或る程度までの木造建築（其大部分は日本建築となるは自然だ）を許さねばならぬそれが地震に耐ゆるとしても火災には甚だ危險であることは論ずるまでもない、そこでこれが豫防としては其周圍に防火樹木を配し相當空地を殘すにあるが、是が爲には宜しく庭園稅を廢するか其稅率を改めて大に庭園の奬勵を行ひ、たとへ田園都市とまで行かずも、それに近きもの、出來得べくんば、米國加州のロサンゼルス、や、バサデナの夫の如くにあり度いと思ふ、市民が市中の勤めから引揚げて、此地に生活の慰安を得たならば、獨り健康上に有益なるのみならず動搖せる近時の思想を溫和に歸し、向上せる生活を營み得且つ都市をして大に健實なるものを造り得ると確信するものである、而もこれは獨り東京に止らぬ各大都市皆然り、少くとも大に其點に研究を向けべきである、幸ひに讀者諸賢は名人の考の足りぬ點は示敎を賜はり、尙ほ誤見を叱正せられんことを希望す。

（大正十二年十月三日稿）

夜長灯に光る

林檎や枕もと



天成の疎林と地形と
郷土材料との自然を
巧みに取りこなしたる
「清荒神」の簡易住宅

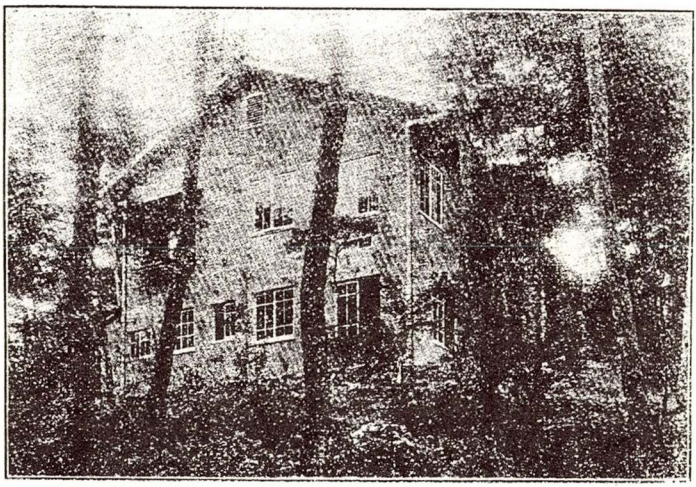
郊邨

阪急寶塚線『清荒神』驛を山の手へ、疎林を鑿つて、碧苔に古寂を懐はせる荒石疊の幾うねりを、爪先き上りに三丁目許り登つて往かば、左手に赤松と雜木の疎林に奥まりて、奈何にもアルプス山中の住家を偲ばせるような洋風擬いの簡素な一ッ家を見受くるであらう、是ぞ、大阪府立西野田職工學校の『模範職工園』の手に、——左樣、青春の血が漲つて、最も進歩的な憧憬に生きてゐる青年職工諸君の力作であつて、寶サイダー會社の專務野田收氏の新邸である。

聞けば、野田氏は郷邑の『生瀬』に先年か日本式の相當宏壯なものを營まれたそうだが、氏の住居

生活に於ける理想を充たされないので、約そプランニングに要する大體の意圖を挿まれた外、殆むど凡てが『職工圖』の手に成つたとのことであるから、簡易住宅として餘程に洗練されたものであることは、流石にと懷はれる。

少々理屈ッぽいが、住宅そのものゝ條件として擧げられてゐるものを約めてみると大體が斯麼事になる樣に想ふ。先づ『保健條件』としては、光明、換氣、稠密、給水、排泄處理、清潔とし、『保安條件』としては、耐火若くは防火、危險避道、建築物自體及び修理の安全、『道德的條件』としては、安靜。住宅の營業的使用、『美的條件』としては建築樣式、內部裝飾、家具の樣式、と斯ういふよ



野田收氏新邸（裏側）

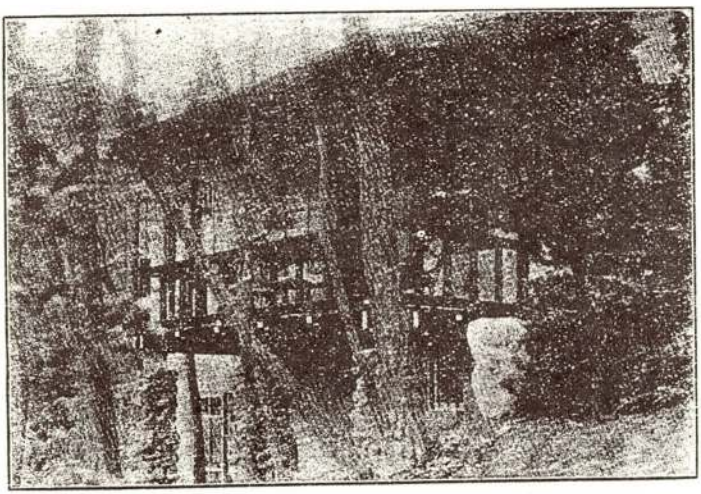
うに云つてゐる。併し、是れで住宅建築の條件が物指しで量つたように完備した譯ではないが、大體に於て住宅の價値評價の基準になるであらう。

斯う書いてみた處、野田氏の新邸を是れで批評しようといふ譯ではない。少くとも斯うした條件の何かゞ取り入れられて、同時に件の建築に何を創造されてゐるか、といふことを觀たらば、それで可いではあるまいか。記者は、是からそれを少々書いみよう。

先づ、外觀は、晩霞樓に似寄つてゐるが、勿論それではない。日本趣味で、保存して可いものは成るべくそれを取り入たる樣にして、洋式との諧調を圖つた處に、設計者の苦心がある。そして、自然の大きな傾斜面を有す

る地形をその儘利用して、正面は晩霞樓の如くに成し、側面から見て三階建とした處にも、自然の利用が面白く出來てゐる。

要約されたる住宅、即ち成るべく無駄のないように咐くスペースの活用を利かす、といふことは現代改良住宅の普遍的條件となつてゐるようだが、斯の住宅も亦最小限度のスケールによつて、充分に諸多の利用を充たしめてゐる處も、今一つ誇りとすべき點であらう。それは口繪に挿入してゐるプランでも判るであらうが、是れで先づ四五人の家族を本位として設計されたのである。其他、例へば中階の階段脇自然の傾斜面を納屋に用ひたる、日本座敷違ひ棚を淺く取つて、その反面を件の座敷と脊中合せの調理場用食器戸棚に用ひたる、或は抽出し棚とした作り附けに簞笥代用の押入れを取りたるその他種々の點に於て、スペースを巧みに約用した處は、なる程と思はせた。



全上（グランラエヴ）

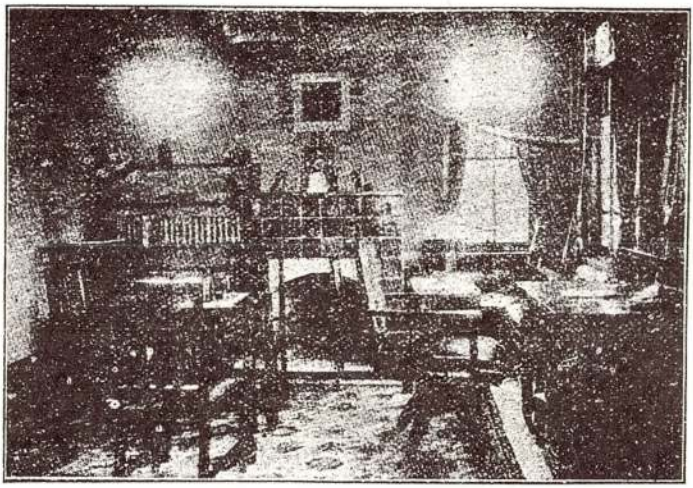
けれども、從來兎角第二義第三義といふように閑却されて來た『臺所』を、充分にスペースを取り入れて而も中央の好位地に配置したのは、奈何にも時代傾向に協ふ一創意であるそれと同時に、保溫裝置として人の氣の附かない處に細かい注意の拂はれてゐることは、保溫と最も關係の密接な周圍の壁を、二重壁の木舞にしたのと、附近の薪材を利用し得るように、居間の壁附煖爐（マンテーピース）を改造して火床（グレー）を除いたが如き、亦留意すべき一つである。

元來、設計者の考へでは、成るべく日本式の優良な特長を保有して、洋式のそれと融調を圖るといふのである、斯うした考へから、何んといつても夏季は開放式な日本座敷を推さねばならぬから、特に斯の意味に於て、中階に六帖許りの純日本式な部屋を設け、そして、常時之をベッドルームの一つに充てられてゐる。

殊に、簡易な住宅として我等の最も情緒を惹く『邊欄土』（ベランヂ）に、日本風の庇を配したのは此處にも純日本式な氣分をこゝろよりと有たすと同時に、餘程洋化した鮮新な情趣を覺へしめる。其他、雨戸を用ひずして、硝子戸のみで開放的に用を充たしたのは、光線を充分に取り入れる上に便宜であると同時に、從來の手繰り式な煩雜を避けたのでゐらう。

その他、材料を出來得る限り、そこら邊りの物を巧みに用ひこなしたのはお手際はだ、と申してよい。それと同時に、斯の建築そのものが內部本意であつて、外部に要する工費を出來得る限り節約したのは、設計者の——恐らくは施主たる野田收氏の——住宅建築に對する基調的な理想の一發露だと、看做して可い。

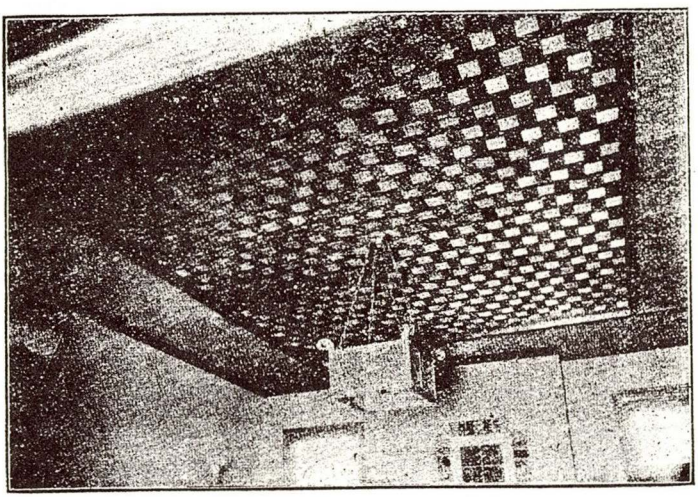
それは斯ういふ譯なのである——豪壯な邸宅によつて生活を誇るといふ樣な考へは、奈何なる人にしても、最早容されない時代思想となつてゐる。單り住宅許りではない、凡べての生活樣式は、時代の推移と共に變つて來た。斯の時代推移は勿論永劫



全上（居間）

な——少くとも永遠な未來を有つものであらうが住宅の建設に就いても、斯の推移を稽へなくてはなるまい蓋し、自己の理想に協い趣味に適した所の、餘程時代思潮に順應した建築にしてもそれが十年二十年乃至三五十年の後には、少くとも、今日から舊時代の贅建築若くは非科學的な建築を觀ると同樣に最早時代に不適當なものとなるには相違ない。

斯うなつた場合を充分考慮に入れて、幾年後には容易に改築し得る程度の建築でなければならぬ。斯うした理想から築かれる住宅は、所謂簡易住宅の外はない。之れを時代語で謂はゞ、住宅の民衆化、若くは、民衆化されたる住宅、とでも云ふのであらう。



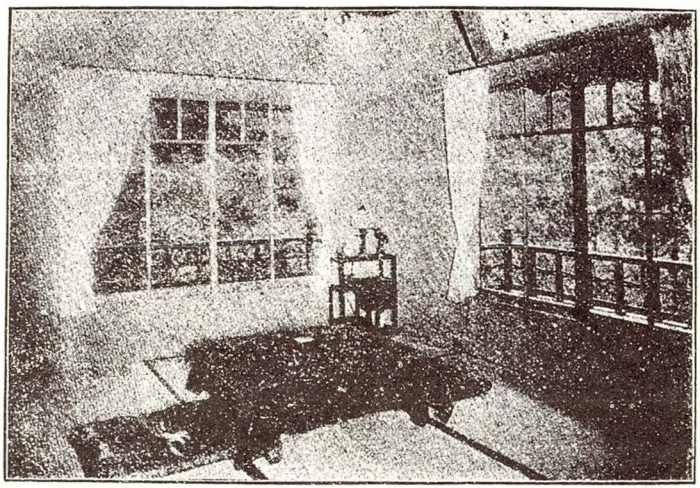
全上居間の天井詳細

けれども、斯る理想を無條件で何人にもといふ譯には行くまいから、せめては、内部の模樣替へで件の理想を遣り、若くは氣分の轉替を爲し得るといふ豫圖の下に建設されねばならぬ。野田氏の新邸も斯うした考へから設計されたのとである。例へば、闥などに日高織を張つて襖の氣分を利し、何時にもそれを取り替へられ、天井の模樣を容易に取り替へられるように綱代を用ひたのもその一例である。

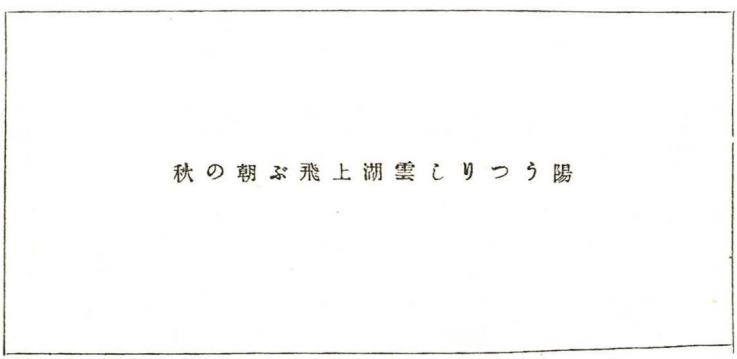
位置はまことに佳い。丘腹の自然な林を殊に赤松の疎林を背景として、居間を光線の最も良い東南に取り、中階に

サンマールーム（常時は寢室）を西北隅に設けたのも、大した事ではない樣でも、スペースの取りこ

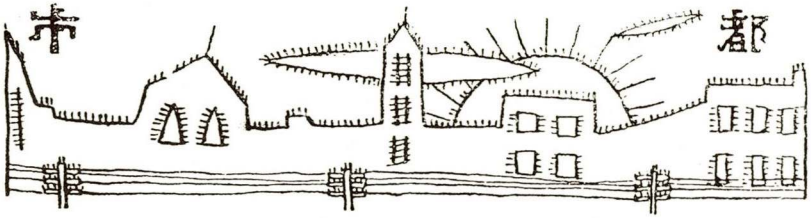
なす巧拙に多大な關係を有つてゐる。地階と云はゞ大概は光線と換氣と、そして、素より眺界に甚だ不備なものであるが、此處許りは、遖に自然の傾斜面を利用したことゝて、浴室も女中部屋も豫備室も、それだけに於ても宛然一つの平家建でもあるような、最も良い位置と佳い狀況に在る。地階十四坪中階と上階とで二十二坪合計三十六坪の切り詰めたスペースに、それだけの配置と設備を整へて、是れで先づ左して不自由のない餘程改善味のある住宅生活を充たし得るのであるから、流石に『模範職工園』の誇りを容して可い。施工日數約二箇月、工費は大體に於て七千圓許りで、坪當百九十圓餘りとは、奈何にも廉く出來たお手際は稱へてよからう。



全上（サンマールーム）



秋の朝飛ぶ湖上雲りつゝ陽



顧みられざる都市の夜間照明問題

加藤善吉

近來都市の問題に關して、可なりに多く種々の方面より論議せられ或は計畫施設せられて居りますが、夜間に於ける都市の施設如何に關しては一も論ぜられて居ない樣であります。夜間の施設、即ち交通保安上看過すべからざる照明問題に就ては殆ど傍觀の有樣であります。近來都市の急激なる發展膨脹に伴ふ高速度交通機關の輻輳は、種々なる保安上の問題より延て社會問題をも惹き起して居ります、のみならず都市集中に伴ふて繁瑣なる目まぐるしい生活を強いられつゝある市民は之れが爲めに、精神的に受ける苦痛の甚だしきものは、夜間に於て殊更に多いのであります。近來電車、自動車等に依る怪我人の簇出其他種々なる事故の發生夥しく、或は工事中の橋梁より墜落して無慘の死を遂げたるものあると聞いては由々しき社會問題であらねばなりません。之等は必竟都市に於ける照明施設の不完備を語るものでなくて何んでありませうか。都市の發展と共に、いやが上にも人事は日夜複雜の度を加へ買物をするにも、晝間でなければ買物をせぬなどと呑氣なことを云ふて居られぬ樣になつて來て居ります、從て夜間と雖も相當に市民の交通頻繁を重ねて來る事は明かであります、然るに我國の都市の實際を觀察して如何なる狀態でありませうか、東京にしても、大阪にしても或は他の都市に於ても、僅かに一部の街路を除

いては鼻をつままれても分らぬとでも云ふ樣な狀態であります、是れは要するに、經濟的方面の關係でありませうが我國に於ては照明の問題が、未だ、充分に民衆化して居らない爲めであらうと思ひます、自動車に乘つて市内を走る一部「ブルヂヤー」階級の人々は夜間照明などは問題でないであらうが、實に照明の恩惠を受けるのは之等の人々よりも、自動車に追ひまくられる徒歩の人であります、ですから單に此の點に於ても一日も早く都市に於ける照明施設の完全を企圖せねばならんと思ひます。

照明問題は又一面都市の美觀てふ見地よりするも、大に講究を要する問題であらうと思ひます、今日見る都市に於ける夜間の光景の俗惡さは見るに忍びない有樣であつて何れの商區、何れの街路、何れの娯樂場を見ても、夜の美觀を嘆賞せしむる樣な施設があるでありませうか、都市美の觀念に乏しい我國の市民は如何なる所にも尨大にして醜惡な而して不調和な看板を掲げ、夜間は之れに點燈して得々としてゐる、殊に都市の first impression であり又多くの場合、最も深い印象を與へる都市の玄關たる停車場を出て眼の當り直ちに展開される最初の夜の光景は如何でありませうか。由來人間の美的趣味は都市の美醜を間接に左右するもので都市が醜惡なる事は、取りも直さず市民が美的觀念のない證左であると共に甚だしき市民の恥辱であらねばなりません、而して都市の美は夜間のそれも一條件とせねばならぬ。否寧ろ其の施設如何に依つては、晝にもまさる美觀を表はすものであるが故に、須く都市の美觀を成す建築、橋梁、道路及公園等に於ても其の目的を表現すべく企圖せねばならんと思ひます、從來は此照明なるものは、其の方法幼稚なると、施設宜しきを得なかつたが爲めに美觀を損ずるものとしてあつたが、近時文化の進展と共に大に進歩して衛生的に經濟的に且つ美觀的なる方法に於て施設し得るに至つたのでありますから、從來の如く單に經濟的關係、又は美觀を損するなどの事を第一の理由として、不完全なる照明に甘じて居ることが出來な

く成つたのであります。見よ商店の如きは其の照明、夜間に於ても晝間と少しも變りなき物體の色彩を表現し得る迄に進歩して居るのであります。故に此の點に深く意を用ひ、十分の考慮を費す必要があらうと思はれます。

都市に於ける公的照明施設として考ふべき先づ第一は街路の照明である、街路の照明とは即ち連續的に街燈を設置して、之れに依て街路を照らす場合であつて、其れが裝置の場所方法及光度は街路の種々なる情況と建築物との關係等を十分に考察して施設するの必要があります、即ち交通頻繁なる街路、左程繁華ならざる街路、或は住宅地の道路等に依て自ら其の要求の程度異なるは勿論であつて、或は不連續的照明にて可なる場合もあり又低光度を使用して可なる場合もあるであらうが要するに少くとも道路を明確に認識する程度であり、而して又都市の美觀を損せざる施設方法を講ぜねばなりません。近頃東京銀座通りに一寸よいものが設けられて居る樣であります。又郊外道路の例一として或る都市に於ては道路の兩側適當の間隔に石杭を打込み白色に塗つて夜間照明の代用をなしつゝあつた處もありますが之は姑息なる方法ではあるが電氣の設備なき道路に對しては面白き考であると思ひます。

第二は橋梁の照明でありますが近來設架せらるゝ橋梁は、概ね裝飾燈を設備して居るが、從前のものに對して美的關係を考察して相當の施設を必要とするのであります、

第三は公園の照明でありますが、現時此の公園問題は都市計畫施設として、大に研究せられて居りまして追々と都市の公園も增設せられ、パークウエーの如き系統的のものも計畫されて居りまして早晩面目を一新するであらうと思ひますが、現在に於ける夜の公園は照明不完全なるが爲めに、其の暗黑裡より風俗上の問題を惹き起し恰も罪惡の構成地と化し終ふの狀態であつて一日も早く此等の弊害を除去するの方策を講せねばならんと思ひます。

蓋し公園の照明は、屋外照明中に於ても稍や其の趣きを異にして、普通公園は樹木多きが爲めに、街路照明の如く一定距離に點燈する時は、諸所に

暗き部分を生じるが故に、公園の風致を害せざる程度に蔭の生ぜぬ樣、點燈の位置を選定して適當なる施設をするが肝要であります。

公的照明ではないが自然街路の照明を補ふ所の建築物の照明は、大阪の第五回內國博覽會の時分から發達したものであるが、當時は俗にイルミネーションと稱して建築裝飾の上から見れば頗る幼稚なるものであつたが、要するに其の目的は裝飾でありますが故に、周圍の裝飾と調和すべきは勿論であつて、適當に之を施せば却て晝間よりも其の趣きを全く異にせる美觀を呈せしむることを得るのであります。

從來に於ける我國の建築電飾は、主として建築の晝間の外觀と殆ど沒交涉の點燈方が採用せられて居りました、即ち建築物の必要なる外廓に低燭光の電燈を連續的に設備して、其の發光體の輝きを直接に目に感ぜしむるもので、其の目的は何等建築物を照明せんとするものでなく、其の器具の如きに至つても不調和なる出來合品でありましたが近時は、主要なる照明器具は、建築設計者に於て建物と調和せるものを『デサエン』して裝置する樣になつて來ました、又照明の方法に於ても進歩して擴射光の直接照明式は、間接照明に依て建築物の外觀を晝間と同樣に、否、より以上に美化する點燈方式が漸次に採用せられつゝあるのでありますから建築物自體の照明し良くそれと系統を同じふする裝飾的照明の元に、夜間美の特長を發揮せしむるを必要と思ひます。

以上述べ來つた如く夜間照明問題は、都市に於ける重要施設の一であつて現在に於ける不完全なる照明をして面目を一新せしむると共に、將來都市の發展、擴張に對しては、都市計畫の從たる施設として、一定なる方針の元に系統的に計畫され而して夜の危險より市民を救ひ安全に、愉快に都市生活を享樂せしむると共に、市民の能率を增進し、一面に於ては都市の美を助長せしむる爲めに凡ての點に着眼して、速かに適當なる施設を講ずるの必要切實であらうと思ひます、聊か私見を述べて大方の是正を乞はんとするものであります。



『いぶん・つるーん寺』から『あたべるはどら』のバスの窓

═埃及旅行記の三═

工學博士　八戸成蟲樓

十月十九日

牧羊館から例のアタベルハドラ迄徒歩して此所からサラジンの廣場迄電車で行く。開路の市電は一等十二の二等六ミリーム均一（一ミリーム約我一錢）である。此所で下車してあとは徒歩、不規則な土人町を通つてGâmi ibn Tulûn（イブン、ツルーン寺）へ行く、拜觀料四ピアスタアであつた。開路の寺院は何所でも皆これ丈けの拜觀料を徴するのであつたが、今迄各寺へ行つた時は案內人が料金を支拂つてゐたので、別に氣にもとめなかつたが、今日初めて何れも四ピ（約我四十錢）を要せしをきゝ、其餘りに高價なるに聊か驚いたのである。

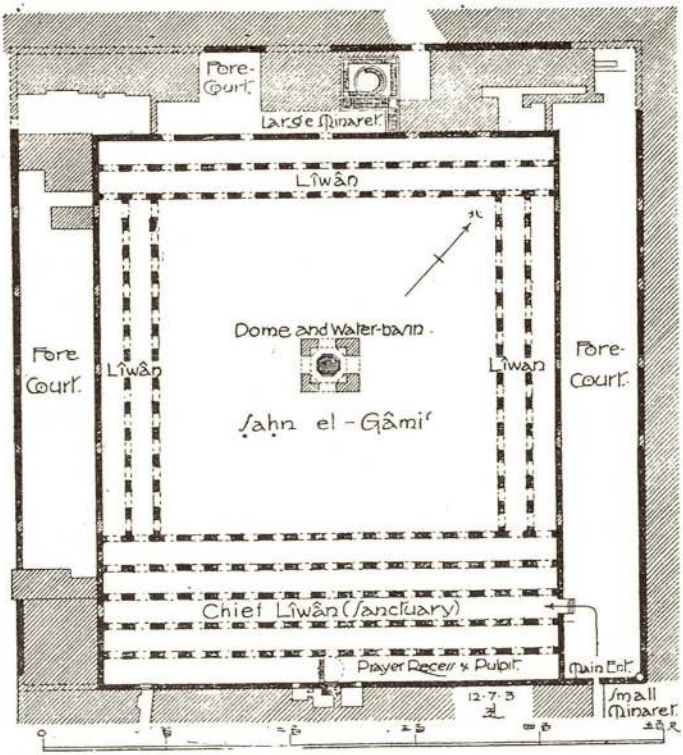
寺は西記八七六年に着手、三年を經八七九年に落成したもので、開路市に於ける最古の回教寺院である。町から石階數級を昇りて入口に達するの

である、入口は大中庭の一隅にあるから、内部へ入るとそこが即ち Chief Liwân で、禮拜所も說教壇もこゝに在る。他の三方は步廊を廻らし、中庭の中央には圓屋根を頂ける大水盤がある寺の四周は矮屋櫛比頗る混雜してゐるから、此の大中庭の廣いのと建築物の堂々たるのとで、非常に宏壯雄大な感じがするのである。

此の伽藍建立緣起に次の一節がある。伊太利亞に於いては、初期の耶蘇會堂建築に當りて、上古の殿堂から柱を失敬して利用したものだが、夫れと同樣に當國でも、回敎伽藍を新築する時はコブト會堂の柱を無斷借用するのが慣例であつた。コブト會堂の位ならまだ罪が輕い、ひどいのになると古代殿堂の大きな一本石の柱でも盜みかねなかつたのである。

施主のイブン、ツールン王は最初此工事について、信任厚き一希臘出身の建築家に設計を下問せられたところ、同人は會堂の柱三百本なくては大王の威勢に相應しい大寺を建築する事は不可能なる旨を上奏したところが流石に Tulunid 王朝の建設者

圖面平寺ンールルンーンブイ市路開

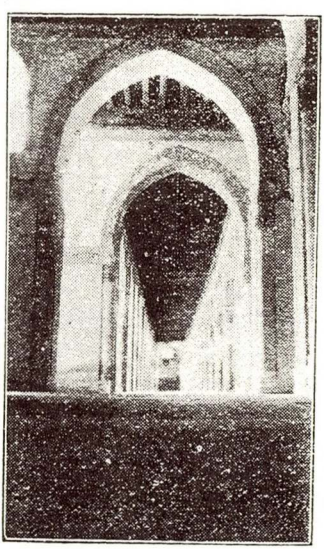


たる丈けあつて、憐憫の情も殊に深く坐した王は耶蘇會堂を略奪するのは良心が許さなかつた。

以前大王の殊遇を蒙り頗る羽振がよかつたが、今は事に座して獄中に呻吟せる耶蘇教信者の建築家某右の趣傳へ聞き、時機至れりと密かに喜び、苦心慘憺漸くにして人をもつて大王の爲めに一本の柱をも用ひずして世界第一の大伽藍を設計する旨を上奏せしめた。此策美事に適中し、王は即座に此建築家を赦し、工事に必要品全部を下賜せられた、斯様にして此所謂世界第一の大伽藍は建立されたのである、と。

緣起といふものは、古今東西を問はず眞僞半々いゝ加減なもので、大概は後人が作成したものである、此の場合も勿論さうであるが、紀伊道成寺緣起や倫敦サヽック寺緣起の様に、これもないよはあつた方が面白い、口碑傳說等は微分積分の様に肩が凝らないでいゝ、そんな馬鹿な事があるものか等と口角泡を飛ばすには當らぬ。

此寺にも勿論柱は使つてあるが、石のでなくて煉瓦石を積み周圍は漆喰が塗つてある、壁も亦其通りである。當寺はMecca Kaabaに模したとも言ひ、またMesopotamiaなるSamarrehのMâthek Ibn Mutassimの直寫ともいふ。何れが眞か私はどちらも知らぬし、繪や寫眞をみた事もないから判斷の下し様がない、併しまた西北側中庭外に建てる大尖塔はTigrisのSamarraの眞似であるとある。Samarraも Samarra も同一であらう、してみると後者は主として此尖塔の事を言つたのかも知れぬ。此塔に就いても亦口碑がある。

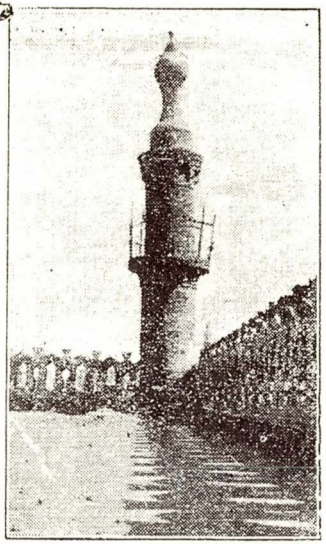


ツールン王は或時どうも考へがうまく纏らず、ぼんやりしながら、ついうか〳〵と指頭で紙を縒つて渦を作つたが、不圖思ひついて此のつまらぬ

仕事に理屈をつけてしまつた、即ち工事監督の技師を呼んで

『コレ〳〵、朕の伽藍の塔はこの樣にせい、朕は卿の爲めに斯樣な模型を作つたぞよ』

と仰せられて、渦にした觀世縒を下賜されたさうである。

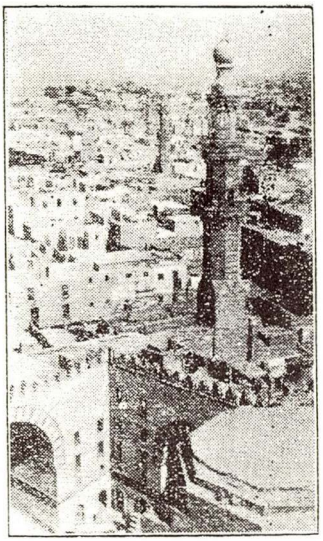


大中庭は約方三百尺、其中央水盤の覆屋は十三世紀の末葉El Mansur王の建つるところ。歩廊の尖拱は此種の早期の例である。壁の上部には埃及無花果（Sycamore）材に經典の句を刻した長押がある、此れはツールン王自身アララット山で發見したノアの方舟（Ark）の船材の一部であるといふ證言をした者があるさうである。僞證罪に問はれねばいゝが。

尖塔の上からの展望は實に絶景でダーシユールギザの大寶形塔は勿論、ナイルの下流は遙に眼の及ぶ限り三角洲の沃野をも展望し得べく、東方には舊城砦及びMokattam丘蜿蜒南北に走り、近く四方には市内回教寺院の尖塔、宮殿邸宅、民家建ち並び、流石は埃及國第一の大都會殷賑の有樣を眼下にみる事が出來る、殊に北方直ぐ足元にあるMedresch Sarghutmash の尖塔が、他の回教寺院の尖塔を背景として樹てるところは甚だ美觀である。

Sarghutmashは何と讀むか、一にSuyurghâtmishと綴つてある、私が案内人にきいたらシャーガトマッシと聞こゑる、二三度きゝ直したが何度でもさういふ、試みに其通り言つてみて問違ないかときくと確かだといつた、方々のいろ〳〵な名前が難かしいので甚だ困る。

塔から降りがけに廻廊の上を歩いた、上は陸屋根だからゆつくり四方の景色を觀賞しながら散歩



が出來る、一巡すると可なりでがあるが、其東北角の小尖塔を近くみる事が出來る利益がある、屋上の胸壁も一寸面白い。

降り來ると案内人は私に歩廊屋上の歩行は禁止してあるが、此番人――私共について歩いた寺の番人を指して――は自分のGreat friendだから貴下の行爲を默認したのであるから、多少の心附を與へられたしと、又しても金か、案内記には歩廊屋上の一巡を勸告してあるのに、こんな事はない筈であるが、知らぬ顔も出來かねたから銀貨一片を與へたところ、彼は一禮して隱しへ納めて市は榮えた。

次にKait Bey寺へ行かうと思ひ案内を命じたらサラーはあんな寺は詰らぬ、何も見るものはないといふ『無くともいゝ、行つてみる』『切符がない』「切符は入口で買へばいゝ』『入口では賣らぬ』『何處で賣るか「Officeで賣る『ではOfficeへ行く』『遠い』『遠くても行く』とまるで喧嘩の樣、要領を得る迄に時間の空費が頗る多い、漸くの事で切符はある役所で賣るが、此所から大分遠方だし殊に今頃行つたのでは時間に無駄が出るから一層の事午前中暴夜博物館を觀覽し、明早朝切符を求め順序よく各寺院を觀覽する方得策である事が判つた。うそかほんとか知らぬが、此上頑張るのも考へものだから今日はカイト・ベイ寺を斷念した。

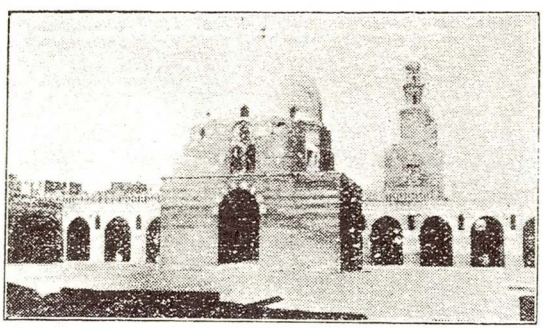
そこで圖書館と暴夜博物館とをみるべく行く。圖書館はKhedivial Libraryと稱し、博物館の階上なるが入口はエハメッド、アリー町にある、一八七〇年Khedive Ismâil の創立に係る、七五五〇〇冊の書を藏すといふ、就中波斯のIlluminated M.S.は類稀れなる美術品である。

階下暴夜博物館の入口は東方に開く、館内には

重に開路市の廢寺又は其他民家よりの美術的並に考古的物品を蒐集陳列せるもので、本館落成以前は總てエル、ハキム寺に出陳しありしが、一九〇三年全部を此處に移し、漸くにして安全に保護し得るの運びになつたのである、言ふ迄もなく美術並に考古學を修むるもの、及一般觀賞家を益する事多大なるものがあるが、觀光客の大多數は時間の關係上殆んど觀るものがないさうである、洵に惜しい事である。

午後はエル、アザア寺へ行つた。アタベルバドラから乘合馬車で適當なところ迄行つて下車、先づMuristân Kalâûn乃其隣りのMedresh and Tomb of En Nâsirの外廓をみた。

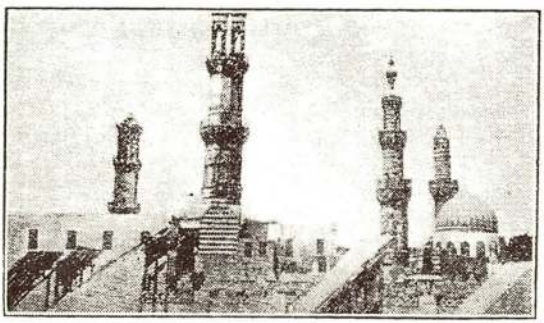
此附近一體にBazarがある、金銀細工の美術品絹布、小間物、其他種々雜多のものを賣る町巾は極めて狹く曲つて居て、兩方の店から手を伸せば町のまん中で握手が出來る位、幾多のアリーやハッサンは凄い目を光らして掠鳥の引懸るのを待つてゐる、アリーやハッサン許りでなく、此所には歐人の店もある、私には歐人とばかりで國籍は分らぬが、いづれ土耳古や希臘やアルメニアあたりの喰ひ詰めものであらう、併し言葉は英語で引子は手を取らん許りにして店へ引込まうとするけれども既に博物館の寶物室で多くの珍寶を觀た眼には、此等の美術品は問題でない。問題であつてもどうせ買はぬのだから見る必要がない、案内人は自己に好都合なる店へ引込まうとしたが應ぜずして歩を早め、Gâmi el-Azharの前に出た。



當寺は西紀九七〇年、ファチマ系のソルタンたりしEl Mui Ez Mezz)の大臣Gôharの建つるところにして、ファチマ系全盛時代の最重要な建築であり、且つ世界に於ける有名な宗教大學で、學生總數一萬四

千人と稱す、學生は回敎國の各地より勉學に來り總て無料で授業せらる、必修科目はコラ　經典に關するもので、他に暴夜語の讀み書き、初等算術及地理とださうで此寺が Universityになつたのは西紀九九八年 Caliph El Aziz の時であつたといふ。

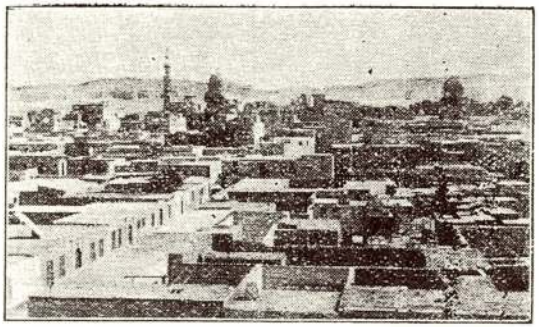
一三〇三年の大震災には當大學も大損害を蒙つたが、相續けるマメリユーク公子の大信仰心より此を修理して元の如くならしめた、其後凡そ五回の修理及建增を經て今日に及んだのであるといふ。寺の前には廣場ありて、こゝに天幕を張り武裝して着劍した銃を持てる巡査立番をなし、天幕內には數名の同僚が休憩をしてゐた、其光景警戒可なり物々しい



眞僞は知らぬが、つい近頃迄此附近頗る物騒で、時には爭鬪殺人等もあつたとか、其爲めの警戒だださうだが、此頃土國の勢稍や回復したので、此邊も大に平靜になつたそうである。大學の入口は此廣場に面してゐる。

正面入口より入りて大中庭を過ぐれば、突當は即ち Liwaned Gâmi で、こゝは講義室になつてゐる、約百五十尺に三百尺の大廣間、床は一面の石敷の上に莚が敷いてある、此上に恰も魚河岸に鮪がついた樣に、若い學生が無秩序にゴロ〳〵寢てゐる、奥まつた一室には禮拜所があつて、こゝで回敎徒二名連に此所に向つて拜をしてゐた、此拜所は常に西面してゐるので、此所に向つて拜せば拜者は常に東面す、即ちメッカに向ひ拜する事になるのだといふ。大講堂の左右即ち南北側の小室は寢室兼仕事室に用ひらる北室より沐浴所（大さ七十尺に百尺位）に達する樣設計してある、私は沐浴所の一見を申出たが拒絶されて了つた。

回敎大學を辭してから徒歩カリフ墓（後出）に向ふ途中、左方の高地へ登つてみたところ、墓の圓屋



根は民家の平屋根の上に抽き出て、そこへ夕日を斜に受けて總てが極めて明瞭に見えてゐた。色は全部七色、背景のモツカタムの丘も、墓も民家も足元の高地も何も彼も土色であるうちに濃淡があり變化があり、空の青色と奇妙に調和して洵に熱帶の夕景に相應しい色であつた。反對の側は開路市が一望の下にあつて、特有の尖塔が今朝ツルーン寺の尖塔から見たよりも數多く、たつた今みた許りのエル、アザアの夫婦塔は目の下にある、此の方面は裏方線で、其輪廓極めて明らかに描き出され、別種の趣があつた。

此高地はフォスタート廢墟發掘の土を捨てたゝめに出來たさうである、此の脚とアタベルハドラとの間、即ち先刻乘合馬車の通つた道路を、バスが通つてゐる、ガタ馬車もバスも料金は同じで一人一回半ピ（約五錢）、此間夕景の混雜は一通でない我國の大都市と撰ぶ所なき亂雜な、歩道も甃石もなき砂ほこりの大道に騒然雜然混沌として秩序なく、驢馬車、乘合馬車、客馬車、自働車、自轉車等が群集を押し分けて來往せる間に、新婚の夫妻を自働車にのせ、前後に徒歩の行列を組み樂隊を先頭に立てゝ、廣目屋の廣告式に優々閑々と練り歩く、殊に電車通との交叉點に於ける混雜は到底名狀する事が出來ぬ、一人の交通巡査がゐるでなし、狹い道路へ四方から車がぎつしり詰まつて、進むも退くも出來ぬ有樣、併し流石に先を爭ふ樣子もなく、十四五分の間に何とか處分はついたがこんな所をみてゐては、いくら最負目にみても半開國とほか思へぬ。

私はバスの窓から此有樣をみて、つい半月許り前に分れを告げた倫敦市の巡査や群衆を想起せざるを得なかつた。彼の靜肅にして一絲亂れざる交

通と、此の喧々囂々灰神樂を揚げた如き無秩序とは、洵にいゝ對照である、アノードとカソードである、我國の群衆は如何と自問して苦笑せざるを得なかつたのであつた。

六時歸宿、先日來の寫眞は博物館にて撮影の分光線不足で失敗に歸したが、他は全部成功した。

（大正十二年七月十四日稿了）

山裾や
　霧に陽のさす
薄紅葉

草干せし
　曳船の道
柳散る



世代推移の原理と都市の復興

工學士　園部文雄

種子の落下と新芽生

『フエニックス』といふ鳥は、或期間經過すれば自ら身を燒きて、灰の中から若い美しい姿で、再び生れ出る、といふ事であるが、關東地方の大慘害も正に斯くの如きものである。

これは自ら燒いたのではなくて、自然の破壞であるから『フエニックス』の諺には當らないかも知れぬ、寧ろ種子が落下して、新に芽生するといふ自然法則の方が、より多く當嵌るかもしれない。

何れにしても、あの灰の中から、若い美しい、そして生々とした、眞に吾々の理想とする都市が再現して、其光輝を四方に發するのも遠い事ではあるまじく、又それに努力せねばならないのである。

吾々は今度の大慘事に、落膽してはならない、夏の間繁り榮へて來た植物が、秋になつて結實、落葉した態は、一見枯死した樣に見へるが、實は

翌春大々的に、繁殖する準備行爲であるかの如くに、今度の大慘害も、來るべき大發展の一階段に過ぎないものと、見なければならぬ、そしてそれに向つて進まねばならぬ。

爛熟し切つた都市生活

近頃の都市生活は全く爛熟し切つたものであつた、吾々は餘りに都市の情趣を逐ひ過ぎた、そして人心餘りに、華美、浮薄に流れ過ぎた。

一方に『銀ブラ』を說くものがあれば、一方にはやれ避暑、やれ避寒と贅澤なことを、得意にするものもあり、尙又御丁寧にも、これの見送り、出迎へをするものもあり『ダンス』や音樂に浮身を扮つして驕樂、安逸を貪り過ぎた。

して見ると今度の天災を、誰かの言ふ樣に天譴といふのも、萬更當らぬでもなき樣であると同時に爛熟し切つた種子が自然に落下する因果律は、吾々の知らぬ間に、既に遠くの昔から廻り來つて居つたのかも知れない。

新らしき發芽と土地の應化力

明治以來五十年間に、繁り榮へて來た我國文明は、殆ど西洋の文化其儘であつた、つまり西洋に繁殖して居つた、文化の種子を日本に播いたに過ぎなかつた。

その爲に發芽、生育した所の、明治文化は、矢張母性を多く持つた所の、西洋臭いものであつたこれは殆度『スキート、ピース』やなにかの種子を亞米利加邊から輸入して、日本の土地に播けば、最初の一ケ年は亞米利加の原産地に於て生育するものと、餘り變りないものが出來るのと同じ事である。

然しながら、日本で一年發育さした『スキートピース』の種子を、翌年再び播いたなら矢張再び原産地に於るものと、同じものが出來るでありましやうか、どうでしやうか。

『スキート、ピース』の樣な、土地の應化力に對する、抵抗の弱いものは、明に其原始性を失つて、大分變つた變態が出來るのであります。

世代推移の原理と將來の都市建築

土地の應化力に對する、抵抗の弱いものを、數代其土地で、培へば段々原始性を失つて、萎縮して終ふか、應化力に對する、抵抗の強いものを移植栽培して居ると、段々と優秀なるものを、作ることが出來るのであつて、種子の改良は皆この式でやるといふ事は、皆さんの既に御承知の通りであります。

私は假りに、これを世代推移の原理と名付けます、そしてこの原理に照して、再び建設さるべき都市建築を、皆さんと一緒に考へて見たいと思ひます。

然しその前に一寸定めて置かねばならぬ事があります、それは種子が其土地に適するか、又は適せないかといふ事に頓着せず、適せなければ何年でも、新しき種子を取寄せて其土地に播くといふ遣方を取るか、又は其土地に育つたものゝ種を取つて改良して行かうといふ遣方を取るかといふ事であります。

これは此度の犧牲が餘り大きすぎる位であつて最早議論の餘地もない事とは思ひますが、根本になる事でありますから、しつかりと、定めて置かねばなりませぬ。

吾々は初代種子栽培費として、五十年の年月と數百億と稱せられる富とを、空費しました、そして無形の種子を多く得たのであるが故に、何うしても、この種子を撰別して或ものは淘汰し、或ものは助長せしめて改良して行かねばならぬ。

再興の都市建築は明かに世代推移の原理に支配さるべきものである。

集中主義と分散主義

今度の震災で、最も明かに、晒らし出された缺點は、集中主義の失敗はあつた、借家政策ばかりをやつて、數十萬の富を持つて居つたものが、此度の火事で、根こそぎに燒れてしまつて、預つてあつた敷金すら返せずに弱つて居る人があるといふが、これなぞも明かに集中主義の失敗である、

こんなことは個人的の問題で、大したこともないが、國家としても、一般に餘りに集中主義を取り過ぎて居つたといふ事も、亦明瞭なる事實である。

帝都の小さいのが、國辱でゞもある樣に思つて帝都なるが故にどうの、こうのといつて京濱に力瘤を入れて、土地に不相應なる、膨大に都市を、築き上げた嫌があつた、そして此度の事件に一國の最高行政機關自身すら、混亂に卷き込まれて、全國に對して充分なる指圖を、爲し得ない樣な狀態に陷つた。

總て物は偏するといかぬものである、醫者の話しによると、食物はなるべく多種多樣のものを少し宛食ふのが、一番よいのだといふことである。つまり混食主義がよいので、變つたものを食ふと人體に必要なものは、何處かに含まれて居るといふのである。牛肉が好きだといつても、牛肉許りでは人間は生存して行けない、米許りでもいかぬといふ事をいふのである。

集中主義を變じて、分散主義を取るべき時期ではなからうか。

帝都復興と地方振興

帝都の復興は、刻下の急務であつて、これの爲には、國民擧つて努力せねばならぬ、と說く人もある、又一面には地方あつての帝都であるから、地方の產業を阻害し、其發達を止めて迄、帝都に力瘤を入れる必要がない、寧ろ地方の振興を先きに計らねばならぬ、と論ずる人もある。

然しながの其帝都なるものゝ範圍、輪廓に就いて、述べた人もない樣であり、其邊の事は甚だ曖昧である。

帝都は勿論一國の首府なるが故に、これが建設維持は國費を以て爲すべきであり、又爲したとて別に論を立てる人もなからう。唯問題は帝都なるものゝ、限界がしつかりして居ない爲に、種々の說が起るのである。

即ち國の行政を司る諸機關の存在地、即ち帝都『プロパー』のものと、東京市なる、一地方とをかごつちやにするか、せぬかによつて分れるのである。

東京に於て說をなす人は、あの膨大なる東京市の地域全體を目して、帝都として居る樣の嫌がある、そして東京が帝都なるが故に云々と、總ての立脚點をこれにおいて居る。つまり東京市といふ一地方が、帝都といふ名前を利用して、いやが上にも膨れ上らんとして居る傾がある。

當路の人もそこに居住して居る關係上、ついそういつた樣な心持になるのも否み難い事であらう救護事業が東京に比べて、いつも遲れ勝である横濱あたりの狀況はこの邊の消息を物語つて居るのではなからうか、そしてそれが又地方振興の論が事更この場合唱へられる所以ではなからうか、

帝都と東京市

一時起つた遷都問題も、九月十二日の詔書により、其聲を潜め、東京が帝國の首都として特種の機關も設けられ、獨り舊態を回復するに止まらず巷衢の面目を新にして、將來の發展を圖る事となつた事は、邦家の爲に喜ぶべき事柄である。

然しながら、集中政策の誤つて居つた事は各方面に於て、既に彌が上にも、體得した事であり、各種の社會的罪惡も、多數の人が集團生活を營むより起るものであるが故に、復興計畫に於ては、これらの禍根を芟除する樣に考へられん事を望むものである。

吾々の考へでは、政府、行政の地域、即ち純然たる、帝都『プロパー』の部分と普通商工業を營む地域とを區劃し、帝都『プロパー』の部分には、騒擾の原因をなすものを全く置かず、如何なる場合にも、混亂に陷らざる樣の施設を施し、然も其建設物に注意して其地域に入れば、自ら敬虔の念に打れ、國家觀念を誘導する樣の環境を形造りたいと、考ふるのである。

帝都『プロパー』に連續する東京市には、大阪横濱、神戸を初め其他の都市と同じく商工業其他を營むに適當なる施設を施し、帝都『プロパー』より一視同仁に眺めて其地方の發達を計ることにすれば帝都復興の地方振興のと唯み合ふこともないだらうし、國家のやるべき仕事と、自治體のやるべき仕事とか判然とつくだらう。

長弓寺の建築と彫刻

―「古寺巡禮」の二―

池田谷久吉

一

螢で名高い富雄川は大和の西の谷を北から南へ流れてゐて、小さいながらも美しい詩趣に滿ちた氣持のよい川である。

この邊一帶は神武東征の頃、長髓彦が住んでゐたといふ、古い傳説のあるところであちらこちらには今も少なからぬ古蹟が殘つてゐる。

眞弓山長弓寺は大軌電車の富雄の停留場で下車して川沿ひの廣いよく磨けた街道を北へ眞直に約三十町もゆくと、北倭村字上村といふ小ぢんまりとした農村がある。

この村の入口に架けられた石橋を渡ると鳥居があつてその奥の山門『長弓寺惣門』をくぐり抜けてすぐ北側の雜木の茂つた森の中に大きな建物が幾つも建て列んでゐる、これが長弓寺である。

背後は山になつてゐるので幾つかの石の雁岐によつて登つてゆくと突當りに南面せる本堂がある

二

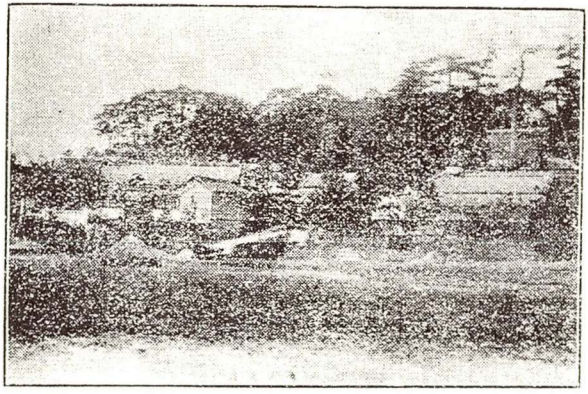
よほど頽廢してゐるが鎌倉時代のもので、平面五間六面、單層入母屋造のかなり大きな建物である、稍高き壇上に立ちて周圍には比較的幅員廣き廻椽を繞らして、しかも豪快雄建にして雅味ある高欄を設け、之がために外觀に調和と優美とを與へてゐる。

正面には一間の向拜が附加され方柱を用ひて、軒は二軒の角垂木で大胆に出來てゐる。

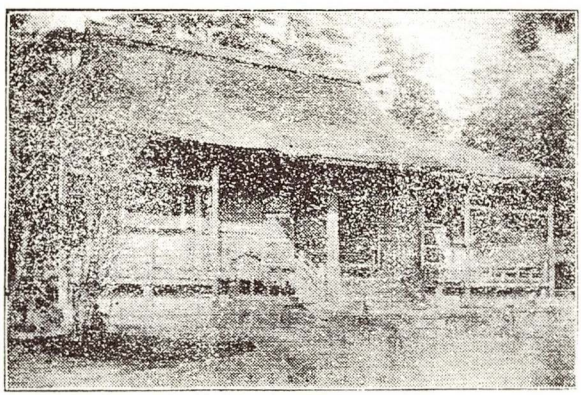
組物は三ツ斗、柱は丸柱にて、内部の天井は他では一寸見られぬ自由な種々の手法を用ひてゐる

即ち、外陣と側柱との間の一間通りは化粧屋根裏であるが外陣内は格組入天井内陣は折上組入天井で何れも木割は雄大なものであるが外部は全部丹塗にて、斗組や蟇股には極彩色を施して殊に頭貫、拳鼻の繰形、蟇股の彫刻は共に申分なき階調を保ちて當期の傑作である。

亦正面入口に中央三戸には桟唐戸を用ひて内部には蔀戸を配して左右兩間には稍纖細なる櫺子窓を設けてゐる、これ等の點は和樣に唐樣を加味した面白いものでこの時代の一般形式を踏用してゐるものである。



長弓寺全景と本堂



屋根の形は檜皮葺としては心ばかりの剛健な感がするが、その檜色の雅致と周圍の配景の綠樹との色彩の調和は實に美しいものである。

三

佛像は本尊十一面觀世音菩薩行基菩薩の作と傳へられてゐる、脇侍の中品、釋迦座像二體は藤原式のものであるが近世の修補が多くて其ために

面相などがよほど俗びてゐるのは惜しいものである、四天王は鎌倉期らしいものだが、これも近頃くど〳〵しく彩色をやりなほしてゐるので折角のよいものを惡くしてゐる、寺傳には藤原緒嗣公の寄進とあるがあてにはならない。

四

此の寺の創立を調べるに一種のドラマチックな悲劇から生れてゐることが一寸他の寺とはその趣を異にしてゐる。

神龜五年三月聖武天皇の勅願によつて行基菩薩の開基になるものであるが、當時鳥見郷の名門に眞弓長弓（本性小野氏）といふ人があつた、彼は男子のなきために三輪高市麿の子長麿を娘の養子として、その日〳〵を幸福な生活を續けてゐた。

その頃天皇はまだお若き事とて盛に野に山に收獵を好んで、常にこの邊に微幸され長弓はその度毎に東道を仰付けられてゐた。

時しも神龜五年三月長弓は長麿と偕に鳳駕を迎へる折柄、偶々森の中より一匹の異鳥、俄に驚き出でたるを發見したので長麿は急いで之に弓を引いた、ところが長麿の射た箭は不幸にも養父長弓に命中して哀れにも即死し彼はかなしくも不孝者になつて終つた。

長麿夫妻は大いに慨き悲しみ忽ち剃髪して罪を謝した、天皇は長弓の非業の死を見て大層不憫に考へられ其冥福を祈らんがために直ちに行基菩薩に命じて、この地に眞弓山長弓寺を開創され剰へ自ら感悟されたのであつた。

これ以來佛教に歸依し、戒法をさへ受持され同年八月には遂に國内に令して鷹を飼ふことを禁止されたのである。

其の後弘法大師入唐して、眞言密教を傳來し近畿巡化の際この地に足を留めて以來眞言宗となり今は御室仁和寺派に屬してゐる。天長年間に至つては左大臣藤原緒嗣公檀主となつて專ら興隆に努め輪奐の美を整へ長弓寺の全盛時代をなしたのであつた〳〵以後九十一代御宇多天皇、弘安二年（紀元一九三八年）今から約六百五十年程前、荒廢せる堂塔を建立したのが現存の本堂である。

搖れる建築

別所悌一

ゴシック人は靈の尖塔を建てゝ肉を忘れた。ルネサンス人はゴシック人の忘れた肉の殿堂を建てた。ゴシックの黄昏は即ちルネサンスの黎明であるとは、一般に信じられてゐるところである。

ゴシック人の靈は思慕し、高揚する。彼等は天へ向つての自由を欲した。彼等は石の上に石を積んだ。彼等はこの石の一つ一つに彼等の靈を完全に表現し得たと自負した。かくあるは決して神に叛逆するためにではなく、神に近づくためにだと自信した。そして厭ふことなく高く高くと石の上に石を積み上げ、遂には、かのロマネスク人が哀しく未完成なまゝに遺して去つた穹窿原理(グロインド・ヴォルト)をうまく繼承し、それを素晴らしい交叉穹窿(ピクナム)にまで完成させた。彼等は尖塔(ボイント・バッド・アト)を建てた。小尖塔(フラムボワント)を建てた。そし遂には、焔の如うに燃え登る火焔式の寺院までを建てたのであつた。而も、その素晴らしいゴシックにも遂には紅い陽が暮れ蒼い夜が下りて、その偉業をルネサンスにゆづらなければならなかつたと言ふのである。何故なら、彼等はあまりにも天への靈の垂直線を重視し、地上の肉の美はしい曲線を忘れたからなのである。

一般の廣い常識として萬人に承認されてゐるやうに、ゴシック人の先驅と見られた彼のロマネスク人は、唯、專心ロオマを小賢しく眞似し手本とし辭書として、單にきらびやかな模倣の藝術への坦々たる道を墮落して行つたのではあつたが、決してそのやうにではなく、ひたすら彼のルネサンス人は古ギリシア人の藝術への正しき復興を目ざして濶歩して進んだ。彼は石を肉の如うに愛した彼等は冷たい大理石を温い肉に刻り變へ初めた、彼等は石の中へ肉の血管を作り、肉を流れる熱い血を流れさせた。彼等は氷のやうに冷たい石を處

女の乳房のやうに刻りあげ、球蓋（ドオム）を支へる柱を巨人の腕のやうに肥え太らせた、彼等はかつてゴシク人も考へつき得なかつた大建築術を完成し、壯麗な大殿堂を青草のゆるやかな斜丘の中腹に建て内壁には殆んど例外なしに裸體人の壁畵を畫きとめた。溫かく明るい太陽は一杯にさんさんと照り輝き、大殿堂は粧はぬ大自然の深奥玄妙な美と自由とに、恣に長く伸々と陶醉した。夫をみる前に大地にごつしりと立てとは、當時の無名の群小藝術家までが始終口にした合言葉なのであつた。今がこそ、實に、人類藝術の黃金時代だと、彼等は口にし詩にし誇らしく記錄して來たのであつた、而も、この榮光のルネサンスが今倒れやうとしてゐるのだ。否。も早や倒れた。何故なら、彼等はあまりにも肉の榮光を偏重し、やゝともすれば肉になれ溺れすぎたからなのである。

藝術は不斷に流動する。藝術の停止は直ちに藝術の死を意味する。從つて、全らゆる藝術運動がめまぐるしいまでに私達の周圍に興亡していつたことに、繪畵に於て明らかにこの藝術運動の流れのあとを見ることが能きるとされてゐる。

印象派。これこそが彼の未曾有のルネサンスの直ぐ後のそしてそれにも數段立勝つた後裔者であると考へられ初めた。否。さうではない、と印像派の同列に出て來た運動に、未來派運動、立體派運動等があると考へられ初めた、而も、極く最近には、これ等の全らゆるものを排して表現主義の運動が激しく起り初めたのであつた。

全らゆる藝術運動は原則として全らゆる藝術に廣く一般に波及するものであつて、繪畵に言つたことは、殆んど例外なしに建築にもあてはめらるべきものである。

印象派の建築。そんなものはかつて見たことがないと、即座に誰かゞ言ひ初めるだもう。未來派の建築、それはそのまゝ建築の破壞を意味すると第二者が言ひ初めるだらう。立體派の藝術。そんな奇妙な！それこそ、その言葉自らが自殺であると、第三者も言ふだらう。も早や、私達はゴシックをもつた、ルネサンスを有つた、何を、外に有つ要があらう、そんな奇妙な建築樣式が、そして

建築様式の幾分の芽生えでもが、一體どこにあるのだと、皆が集つて抗辯し初めるに違ひないとおもはれる。

さうだ、或はさうだ、そんなものは一つも私達の周圍にはありさうもないのだ！而も、私は斷言する。あると斷言する。今現にその機運は至る方面至るところで、現はれやうとしつゝあるのであつて、唯、建築は最も偶像的な藝術であるため、他の藝術の有たない雜多な技巧上の約束に心なくも縛られて、その立ち上がるのが幾分遲いまでゞあり。後れたままでなのだと考へられる。

しからば、表現派の建築は？これはも早やそんなものを知りはしないと言はうとする者を、輕く嘲笑するに違ひはないのである。現に、も早やその一二の最も有名なるものは新聞紙の三面の寫眞版に現はれ、日本の片田舍のたゝき大工の家にまで紹介された筈である。否、この最後輩の表現派運動こそが、確に最も素早く賢く、その手を他のどの運動よりも早く、建築の世界にまで長々廣々伸し、眞實の意味に於て、ルネサンスの選ばれた後裔者だらうとし初めたといふ感がある。

一言で言へば、表現派人は今までのどの派の藝術家よりも、生命の流動を高潮し重視する。彼等はかつて藝術の停止などを考へたこともない人達のやうにすらおもはれる、彼等は生命の激しく生々した流動そのものを、そのまゝ直ぐ激しく表現しつくさうとする。

搖れる建築とは、彼等がこれこそ眞正の建築だと誇示するところのものである。彼等は世の所謂設計者建築家建築論者を無視し拒斥する。『搖れる建築』なる一見笑止らしく見える言葉の解釋に迷ふ者は、彼等を最初から太刀打ちすることは斷念しなければならぬ。彼等は美しく磨きあげられた人造大理石を積み上げる前に、昂揚し激しく生長しつゝある靈を積みあげやうとする。彼等は大廣間を普通は美はしい花燈で明るく裝ふ時に、手摑みした心臟を平氣で胸から石の亭の上へ投げ出す彼等は石と石とを情熱なく積み重ねて、切角の大殿堂を化石とするを欲しない。彼等は野の草のやうに殿堂を建てやうとする。野の草はぐんぐん思

ふまゝに生長する。凝乎として生長してゆくのではない。草は搖れつゝ生長してゆくのだ！彼等は生長しつゝある殿堂を考へる。彼等の建てた殿堂は不斷に生長しつゝあらねばならない。建築物はこどもの遊ぶ燐瓦積みではない。石を石の上に一萬個積み上げ、倒れないやうに鐵や石漆でくつつけたものが建築ではない。彼等の考へる眞正唯一の殿堂は、心臟を有ち體溫をもち、不斷に搖れ搖れて生長しつゝあらねばならない。藝術は死屍ではなく生命であり、生命は固着ではなく流動だからである。

何といふ無茶苦茶な叛逆であらう……？さうだ彼等は叛逆する。全らゆる建築樣式にまで叛逆する。彼等はゴシックにさへルネサンスにさへ、勇ましく叛逆する。彼等はひたすら生命を追つて、あらゆる生命なき石積を蹴散らす。彼等は嵐のやうに亂暴でさへあり、大海のやうに或は高まり、又低まる。彼等は生命そのものでさへあるから。

彼等は靈の尖塔を建てやうとは希はない。肉の殿堂を建てやうともおもはない。彼等には、靈と言はれ肉と呼ばるゝものが、不二一如な生命そのものだと考へられるからである。彼等はゴシック人のやうに肉を忘れ靈にのみつかうとはしない、彼等はルネサンス人のやうに靈を蔑め肉に溺れやうとはしない。すでに十五世紀の中頃、靈の尖塔は素晴らしい火焔式（フランス・サエン・マクルウ寺）にまで發達させられ完成させられた。彼のルネサンス人が、近世を華やかな世紀から世紀へとどんなに誇りかに彼等の藝術の讃歌を歌つたか。而も今、一切の歪める價値觀は轉倒され、曲れる藝術觀は殺滅される。相對價値を絶對價値にすきかへられる。藝術の世界ではアインシュタインの原理もいばることは能きないと表現派人は宣言する。生命こそ絶對である！生命こそ愛だ、眞だ、美だと彼等は叫ぶ。卽ち、彼等は全らゆる生命ならざるものへ向つて戰ひを初めることを辭せない石と鐵とコンクリイトで、も早や動きのとれないまでに完成された大建築術をさへ、彼等は生命なきものと見れば、一瞬にして棄て去るを躊躇しはしない。彼等は全らゆるものを超えやうとする。

ゴシックをさへルネサンスをさへ、彼等は越えて進む。全らゆる偏狭と空華とを打ちこはさうとする。も早や、こゝにほ表現派なる派も存在しない自分達こそ、人間、自分達がこそ、人類藝術を創見し完成しやうと、彼等は意氣込む。大地と大天と、大天と大地と、彼等はこれらを不二一如だと大びらに揚言し、宣言する。

何といふ、藝術の、否、全人類の、輝かしい更生への道であらう。地平は、今、仄かな白夜（ペテルブルグ）の混迷のうちにある。だが、やがては揚々たる太陽が、爽やかな黎明の空に、かゞやかしくさし昇つて來るには違ひないのである。

搖れる建築の大完成の日は、或はずうつと遠い未來かもしれない、或は極く近いかも知れない。だが、きけ。搖れる建築はも早や呼吸づき初めたお。心臟の呼動もきこえる。やがては、この微かな生命の呼動が、人類の激しい大奏鳴樂となつて嵐のやうに、周圍に駈けめぐる日も來やう。

川波にしばし
見えゐる
一葉かな

住宅を建てる標準

翠煙庵

今更らのような氣もするが、日本の住宅は改善せねばならぬ、といふ問題は最早古くして何時も新しいのである。十人が十人、百人が百人、斯の問題に就いて要求される處は、皆な多少の特異を有つてゐる。それ程に、住宅を改善する具體的な問題になつては、一々異つてくる。謂はゞ、無數なそして一々異る要求が、住宅改善といふ大きな風呂敷の中に包まれてゐるといふようなものであらう。

併し、此等改善問題の要望が異つてゐても、それは、一々な局部的な事であつて、それらを包容し統一したるところのものがなければならぬ筈である。左なくば、住宅の改善といふ問題は、竟に統一も包容もない、只雜然として或事實が並存してゐる、といふに過ぎないことになる。さらば、恁麼ものがその普遍的な標準であり條件であらうか。

是れに就いて、記者は Howsing and the Howsing Prodlem を「住宅問題」と譯したものから、その考へを藉つてみたい。

現在の狀態に於て、住宅を視察するに最も考へて置かなければならぬ三箇の條件がある。曰く「家族と獨身生活者との關係に於ける住宅の性質。曰く、各都市に於て得らるゝ處の產業や敎育や社交や乃至は娛樂杯の便宜に就いて、家族間相互の關係から觀察したその都市に於ける住宅の位置。曰く、住宅に所要の經費と收入の關係、それから家族間に於ける收入の分配、斯の三條件だと云つてゐる。

彼れは、次いで、家族の健康と幸福とを保障する要件として、保健、保安、道德、美の四つを擧げゐる。そして、それらの一々に就いて稍詳細に

述べてゐるが、それに據ると、先づ、

(A)保健條件

(1)光線關係

(い)凡ゆる部屋は晝間に何等人工的な照明を施さずして明るいかどうか。

(ろ)他の建築物と逼り合つたり、窓の位置が拙かつたり、樹木で塞がれたり、建物の位置が惡かつたり、不要な程廣過ぎるか又は不要な窓掛を用ひたり、その他、家具の配置が拙かつたりして、光線の射入を妨げないか。

(は)住宅内に暗い部屋があつた場合に、それを明るくするように出來得る事、殊に構造を變へ得るかどうか。

(に)光線の射入量を增し、又各室にその射入時間を延長し得るよう室の配置をなし得るか。

(ほ)最も明い部屋を有利に使用し得るか。

(へ)人工の照明の用ひらるゝ場合、それが最も適當なる方法を用ひ得るか。

(2)換氣の關係

(と)換氣方法の最も適當なる事。

(ち)種々の換氣法を用ひてゐるか、若し用ひてゐなくば其理由

(り)焚火設備の種類と、それが換氣の助けとなるや否や。

(ぬ)焚火方法が人工換氣を適當ならしむるに足るや否や。

(る)中庭、路次、附近の工場、換氣坑、其他換氣を可能にし有理にし又愉快にするような屋外空氣があるか。近隣に於ける空氣汚濁の原因は何であるか。

(を)蠅蚊等の侵入する恐なく窓を開き得る窓覆があるか。窓覆の模樣如何。

(3)一家居住者數の關係

(わ)部屋數とその用途。

(か)寢室への交通は居室によるか他の寢室を過ぎるか。

(よ)便所の位置と寢室及居室との關係。

(た)一寢室に對する人數、其の性、年齡及び

家族との關係に依る區別。

(れ)寢室の廣さと、各寢室に於ける人數及び寢床の數。

(そ)晝夜の入代りに於ける寢室及寢床の使用つ同居人の數、其の性、年齡及び家族との關係に依る區別。

(ね)寢室煖房の方法及び睡眠時間中換氣の方法。

(な)家具其他屋内を塞ぐ物品の占むる室内空間容積。

(4)給水關係

(ら)水はアパートメント内、廊下、窖、地床室、仲庭、街路等で得られるか又は近所の家屋若くは庭から得なければならないか。

(む)給水は自治體で支配してゐるか。又は私設會社等に依るか。

(う)水の使用に適することを確めるために如何なる試驗が行はれるか。又其試驗は幾度行はれるか。

(の)水の出は十分であるか。又不十分にして不規則であるか。

(く)沐浴設備は如何なものがあるか——例へば浴槽、灌水等——又は使用し易い位置に水があるか。

(や)沐浴其他の目的に對して水を沸す方法奈何。

(ま)適當なる洗濯の設備があるか。

(5)排泄物處理の關係

(け)街路下水があるか。又住宅は其下水と接續して居るか。

(ふ)便所の樣式及び位置奈何。便所は下水に接續して居るか。若し接續してゐなければ糞尿處分の方法如何。

(こ)防臭瓣を附した鉛管設備の放水管があるか、又其の防臭瓣の種類如何。

(え)塵芥は市で取集めるか。又其收集めの規則と方法如何。塵芥取集めは適當に行はれて居るか。

(て)灰、紙屑等は市で取集めるか。又は他の處分方法を用ひてゐるか。其等の方法は適

當であるか。

(あ)アパートメント内又は其の周圍に芥溜があるか。

(B)保安條件

(5)避難梯の關係

(さ)火災の場合に容易に見出し得べく又火焰又は煙の爲めに通路を遮斷さるゝ恐なき建物の適當なる出口があるか。

(き)必要なる場所に、寄附き易く又昇降し易き耐火構造の避難梯があるか。

(ゆ)火焰の爲に避難梯の使用を妨げらるゝ恐あれば其の危險の種類。

(め)出口を塞ぎ又は避難梯の使用を妨ぐる可燃物の存在。

(み)出口に直に接續する避難梯があるか。避難梯の下端に障碍物なく、又煙火焰蒸氣等に妨げらるゝ危險を避くるだけの餘地があるか。

(6)耐火の關係

(し)修宅建築材料の種類。

(ひ)屋内及び建築物の他の部分に於ける人工照明の設備が火災の危險を避けて居るか。

(も)架線、煙突等が正當なる取締の下にあるか。

(せ)建築物の一部が煖爐、燈火、煖房管等に接近せるため、無益に燃燒の危險を犯して居るものはないか。

(7)建築物内に於ける可燃物との關係

(い)建築物内に置かれたる可燃物質の種類位置及び量。

(ろ)火氣に對して是等の物質を保護するために奈何なる方法を取つて居るか。

(は)斯る貯藏物から火を發した場合に建築物自體を保護するには、奈何なる方法を取つて居るか。

(8)建築及修繕

(に)斯の條件は唯外線に現はれてゐる危險例へば脆弱なる又は破損せる階段、煉瓦其他の建築材料の落下に因る危險、廊下に於ける障碍物、位置不良なる物乾臺、其他類似

の條件を確めるの外はない。

(C)道德的條件

(9)安　靜

部室の配置と家族外の人物の存在は安靜に多大な關係を有つてゐる。又住宅の密集せることも同樣に安靜の程度に影響される。

(10)營業的使用

諸多の罪惡例へば賭博、賣淫、泥醉、喧騷などのような惡德的行爲は多く住宅と關聯して生ずる。殊にこれ等は營業と關係が多いから、住宅を營業用に使用するより生ずる影響を充分に考量しなければならぬ。

(D)美的條件

特殊なる考量を拂はれたる住宅建築には、多少なりとも美の存在を認め得るが、從來多くは住宅の美が居住者の情操や道義心に影響されることは餘り考へられてゐない。殊に、下等な生活者を入るゝ住宅建築が極めて粗雜惡劣であるといふことは、奈何にも美といふものゝ無用視されてゐるかを推知される。若しそれ、相當な建築にしても、美を有つてゐるのは、それが一種の商品化されて、收入を增す爲に用ひられてゐる。而もその美や、拙劣な構圖や色彩などで多少現はしてゐるのだから、ほんとうな意味と效果に於ける建築美はよく閑却され勝ちである。內部の裝飾に到つては、相當金の掛つた餘りに多くのものを用ひてゐるが、それは大した效果はない。寧ろ金の掛らない簡素なもので美を表現することこそほんとうに美を創造するものである。

(E)

住宅の環境的條件

是れに就いては、さらに、衛生、安全、道德的要素、美的要素の四大條件に分ち、その各項に就いて述べてゐる。

(1)風位と日光

(2)街路の淸潔

(3)空氣汚濁の原因

停滯せる池沼

被蓋なき下水

塵芥の堆積

(4)有害なる瓦斯
(5)無用なる音響
(6)日除の樹木其他の植物
(7)公園又は遊興場に近きこと
(8)沐浴の便利
(9)街路交通の安全
(10)街路の危險なる使用及び突出せる看板
(11)近隣に於ける失火の危險
(12)街路照明
(13)娯樂中心
(14)立入り得る空屋
(15)賣淫
(16)酒類賣買
(17)賭博の巢窟
(18)建築法の取締
(19)街上廣告
(20)空地
(21)風致の保存

以上は、住宅建築に方りて考慮すべき條件の概略を述べたのであるが、勿論、之を以て必ずしも科學的な完備條件と謂ひ得ざるも、大體の據るべき方向を識るには、是で差支へないと想ふ。而して、日本の住宅は、特殊な材料と構造をもつてゐるのだから、日本式住宅の條件とし考ふべきものは、他に異つた種々なものがあらうと想はれる。例へば、美的條件にしても、日本式家屋の美は、それ特有な内容を有つてゐる處の美であるから、素より歐風建築のそれと同日に論ずべきでない。又道德的條件にしても、居住者の慣習と思想の東洋的要素を多分に有つてゐる日本人の住宅としても、それ自體特有な道德條件に支配されなければならぬ。併し、是等は、日本人といふ包括的な對照を腦裡に入れての考へだが、扨て、その日本人たるものゝ一人々々に取つて考へたならば、孰れも個性と趣味と、そうして對環境の條件を異にしてゐるから、住宅建築の條件を決する上にも、等しく一々特異な條件を生じて來る。斯く考へてみると、住宅建築に就いての條件といふことは、たゞ抽象的な條件の外はないと同時に、それを一々異る對照から咄く應用して行く處が、建築家とし

ての生命であらねばならぬ。隨つて、建築家は、圖案家であり、構造學者であり、衞生技師であり交通學者であり、電氣技術家であり、若くは地質學者である、その他、曰く何と、謂はゞ、凡ゆる學術に交渉を有つてゐる、その綜合的應用者だ。日本の住宅建築は、まつたく今や動搖期である、その歸趣點を求めむとして——若くは創造せんとして——渦流を生じてゐる。斯のときに方り、斯る流れに一定の方向を與へて、住宅建築の凡ゆる條件を權威的なものとして生ぜしむることは、勿論、時そのものゝ自然にあるが、それは亦建築家の指し示す腕の方向に在る。

紅葉山麓の駕に草廬し

役員及職員

副會頭片岡　安
理事　池田　寛（理事長）
理事　宮本長治（主計）
理事　園部文雄（主記）
理事　設樂貞雄（編輯）
理事　野呂長四郎（編輯）
理事　宮本金七（編輯）
理事　本田　登
理事　佐藤彰美
理事　竹腰健三

臨時會務委員
（主計）宗　兵藏
（編輯）小川安一郎
（編輯）谷　民藏
安井武雄
野村一郎

職員
江村郊邨
西谷節
清川伊佐
伊藤二世子
（囑托）越山達

會員	二七三	會員（地方）	一〇二
名譽賛助員	七〇	終身賛助員	五五
特別賛助員	二九	普通賛助員	四七二
合計（九月廿五日現在）			一〇〇一

本誌及廣告料定價表

本誌	册數	定價	郵稅
	一册	七拾五錢	貳錢
	十二册	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓

特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ

大正十二年十月廿五日印刷
大正十二年十一月一日發行　（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目卅一番地
印刷所　大阪活版所

大阪市北區絹笠町九
大江ビルヂング三十七號室
發行所　日本建築協會
電話北四一九一番
振替口座大阪三九、九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

日本建築協會々報

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ノ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラントヲ希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會ヲ申込ミ履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス

贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身贊助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別贊助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通贊助員―建築ニ關係ヲ有スル者

贊助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラントスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別贊助員タラントスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通贊助員タラントスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會內ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ當該會員ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ報告ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十條　會員ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ノ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ニ於テ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ通知ス

急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十一條　本會ハ春秋二季大會ヲ開行ス

第十八條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般ノ事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル講演會ノ開催

七　建築ニ關スル講習會ノ公開

八　建築ニ關スル視察

九　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十　理想的建築ノ計畫

十一　其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ス

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別贊助員ハ特別贊助員年額金九圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助費年額金六圓本會ニ前納スベシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

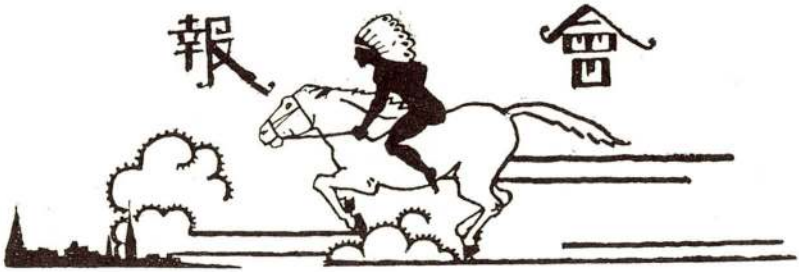
第二十二條　本會ノ財產積立金及毎月ノ收支ハ主計其計算ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產積立金及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル解釋ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ定ム

細則ニ之ヲ定ム

附二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得



關東震災義捐金寄附金額及芳名

△金五拾圓木子七郎殿△金參拾圓片岡安殿谷口德政殿△金貳拾圓井上貢殿生野彌三郎殿德政金吾殿武田五一殿田中豊輔殿田中鋼殿能村知二殿國枝博殿黒瀬政雄殿山脇友三郎殿松井貴太郎殿宮崎貞市殿島田眞馨殿△金拾圓池田實殿伊藤新三郎殿長谷部銳吉殿萩原貞殿橋本勉殿花田孝二郎殿小笠原銅殿小川安一郎殿岡本新二郎殿岡田平藏殿和田貞治郎殿渡部幸吾殿葛野壯一郎殿横濱勉殿谷民藏殿瀧村松之助殿宗兵藏殿波江悌夫殿上谷利夫殿野村一郎殿野呂長四郎殿安井武雄殿山本窯業商店殿福永佐和吉殿安藤伊右衛門殿安達收一殿佐藤彰美殿宮本長治殿宮崎治三吉殿設樂貞雄殿森上浩行殿△金五圓伊藤正文殿一井九平殿石井久雄殿石田晴治殿橋本舜介殿林田瀧次郎殿伴武夫殿西岡道臣殿大倉直三殿岡本茂樹殿大隈貞喜殿片岡長參殿吉木久吉殿坪井誠一殿長尾繁治殿中川廣殿中川彌八殿雜波修吉殿村野藤吾殿村松啓太郎殿上田喜二郎殿久保田繁亮殿久保玄次郎殿久保田小三郎殿增田直一殿前田武正殿松本宇吉郎殿古掾正次殿小松靜殿小寺彌一殿小林喜太次郎殿小松萬殿小谷豊吉殿安立紀殿佐野謹三殿木村梅次郎殿北村萬治殿光安梶之助殿清水隼人殿平井三郎殿牛塚鎗吉殿毛利泰三殿森篤次郎殿本野精吾殿森本藤吉殿瀬戸强三郎殿△參圓磯吉一殿近澤武夫殿大塚錦三殿加藤一俊殿吉本幸一殿竹谷德次郎殿高岡與三吉殿高柳宗一殿中川將殿中村重藏殿植村佐則殿藤澤安太郎殿藤野松九郎殿古川豐殿小西一郎殿兒玉廣太郎殿流石信夫殿木村寛一殿設樂貞三殿△金貳圓池田谷久吉殿若田久作殿川口一二殿谷田實殿向井傳藏殿植竹春重殿久米兵藏殿增井敬殿小貫賴政殿遠田音吉殿朝永國次郎殿佐田佐太郎殿芝田知重殿△金壹圓井上義一殿橋元喜藏殿川崎保太郎殿藤元助一殿小西武雄殿△貳圓佐藤理事設樂理事宗委員谷委員小川委員

合計金壹千圓也

會報

一關東震災義捐金寄附の件

本協會が曩に會員賛助員諸君に震災義捐金を募集しましたに對し應募下されました總額金九百九拾八圓となりましたこれを理事者に於て壹千圓として日本建築協會有志百三十一名の名義を以て大阪府へ寄附致しました寄附金額及氏名は別項掲載の通りであります、右義捐金寄附に對し大阪府知事より左の謝狀を受けました

拜啓陳者今次の關東地方に於ける震災は

實に前代未聞の悲慘事にして同胞の均しく默視するに忍びざる所に有之候に不肖等發起人として汎く江湖の同情に愬へ義捐金品の募集に着手するや直に熱誠なる御賛同を得金壹千圓也御寄贈被下以御蔭諸般の救援施設孰れも機宜を失せず着々好果を收め居候段御諒承を仰き度茲に發起人を代表し深く感謝の意を表し候　敬具

大正十二年九月二十八日

大阪府知事　土岐　嘉平

日本建築協會有志御中

二、震災調査委員踏査經過の件

本協會は震災地踏査の爲め東京地方へ八名湘南地方へ七名計十五名の調査委員を派遣して調査を了りました調査報告の詳細は印刷物として配付する豫定であります

今回の調査に付日本建築七會は混亂の折にも拘らず調査員一行は非常なる歡待に預りまして且調査上大層便宜を與へられ今村博士の報告書東京横濱の寫眞繪葉書等其他の寄贈まで受けましたのは洵に感謝に堪へざる次第であります

本協會は不取敢感謝狀を發送致しました

三、横濱に於ける罹災者救護病院建設の件

本協會の發案に係る設計により大阪府が横濱に於て罹災者救護病院の建設をすることになりまして園部理事は府の囑託を受け同地へ出張監督して竣功致しました

四、震災調査公開講演會の件

震災地踏査を了りましたので公開講演會として關東震災視察講演會の名目の下に第一回を大阪に於て開くことに致しまして大阪朝日新聞社後援で十月八日午後六時同社大講堂に於て開催致しました聽講者無慮壹千名非常に盛大なる講演會でありました演題及講演者は左の通り

將來の都市建築　工學博士　武田五一氏
耐震耐火の建築　工學士　安井武雄氏
木造建築と震災　工學士　本野精吾氏
關東震災の教訓　工學博士　片岡　安氏
幻燈說明　工學士　橫濱　勉氏

第二回を愛知縣及名古屋市後援の下に十月廿一日午後六時名古屋市第一高等女學校大講堂に於て開催致しました當夜聽講者は縣市の首腦者をはじめ無慮壹千餘名是亦非常に盛會なる大講演會でありました演題及講演者は左の通

開會の辭　名古屋市都市計畫部長
　工學士　鵜飼賢一氏
將來の都市建築　工學士　池田　賓氏
煉瓦造建築及木造建築と震災
　建築士　小笠原銅氏
耐震耐火の建築　工學士　宮本長治氏
關東震災の教訓　工學博士　片岡　安氏
閉會の辭　愛知縣建
　工學士　田敏雄氏
幻燈說明　工學士　橫濱　勉氏

右何れの講演會に於ても後援者の熱烈なる御援助を受けました本協會の感謝に堪へざる次第であります

この公開講演會は當初より四大都市で開催の計畫で次回は京都神戸市に於て開催の豫定であります

五、關東地方在住會員賛助員へ見舞の件

今回の大震災に付本協會は關東地方在住の會員賛助員百餘名其他に見舞狀を發送致しましたに對し左の諸氏から御答禮を受け御無事の報知がありました

齋藤久孝氏、須藤眞金氏、山崎源逸氏、德川家家扶、加護谷祐太郎氏、北條時敬氏、千賀正人氏、福田作雄氏、淺井新一氏、小

林麟太郎氏、佐伯佐吉氏、山川健次郎氏、濱野三郎氏留守宅、河村一太郎氏、安藤謙介氏、德永庸氏、荒木賢治氏、弓削鹿治郎氏、津田鑒氏、古市公威氏、松澤一松氏、西田榮一氏

建築學會へ見舞電報及書狀並事業に關し照會狀を發送致しました處今回副會頭及理事長宛にて叮重なる謝狀を受けました

六、理事辭任の件

舟橋主計理事は今回の東都震災に付關係會社復舊事業の爲年內滯京の由を以て理事辭退せらるゝことになり理事會承認の上後任として理事宮本長治氏主計を分掌することに決定致しました

會合

○臨時理事會

△日時　九月二十九日午後五時—九時

△會場　本協會會議室

△出席者　佐藤理事、設樂理事、宗會務委員小川會務委員、谷會務委員、西谷書記

△報告　關東震災義捐金應募額に付報告

△議事　一、理事(主計)舟橋喜一氏理事辭任に付承認並後任者に關する件

宗理事長代理に於て會計引繼をなすことに決定

二、震災義捐金處分に關する件

義捐金寄附者氏名及金額は十一月號本協會雜誌に掲載すること

三、十月三日震災調査委員(特派)會及臨時理事會開催に關する件

○震災調査委員(特派)會

△日時　十月三日午後六時—八時

△會場　堂島ビルヂング九階大食堂

△出席者　片岡副會頭、池田理事長、野呂理事、佐藤理事、宮本長理事、宗會務委員、谷會務委員、安井會務委員、野村會務委員武田委員長、長谷部、本野、本多、小笠原、大倉、川口、横濱、村野、福永、[illegible]塚、光安設樂、久保田、谷田、古川各委員、西谷書記

△記事　一、一同食堂に入り晩餐を共にし食後片岡副會頭より過日來の調査の勞を謝し併せて報告に關する希望を述べて一場の挨拶をなす次いで武田委員長より上京後の踏査狀況に付大体の報告を述べ食堂を閉ぢ別室に於て左の件に付協議す

△議事　一、公開講演會開催の件

日時、會場、講演者、幻燈使用、其他に付議決す

一、右畢つて池田理事長より報告書編纂に付理事側の希望を述べて散會せり

○臨時理事會

△日時　十月三日午後五時—六時

△會場　本協會會議室

△出席者　片岡副會頭、池田理事長、野呂理事、佐藤理事、宮本長理事、宗會務委員、谷會務委員、安井會務委員、野村會務委員西谷書記

△報告　一、本協會募集震災義捐金處分に付宗會務委員より報告

二、舟橋理事(主計)辭任届出に付會計引繼經過報告

△議事　一、舟橋主計辭任に付後任主計に關する件

宮本長理事主計を担任することに決定す

○理事會

△日時　十月八日午後四時三十分—五時三十分

△會場　本協會會議室

△出席者　片岡副會頭、池田理事長、園部理事、野呂理事、佐藤理事、宮本長理事、谷會

務委員、安井會務委員、野村會務委員、江村書記

△報告　園部理事より横濱に於ける罹災者救護病院建設に關する經過報告

△議事　一、十月例會に關する件

二、京、神、名古屋地方に於ける講演會開催に關する件

本夕は大阪朝日新聞社樓上に於て本協會主催同社後援の下に關東震災視察講演會を開催せるを以て右にて議事を止め一同講演會場に赴けり

○湘南地方震災調査委員會

△日時　十月九日午後六時―九時

△會場　本協會會議室

△出席者　古塚正次、長谷部鋭吉、村野藤吾、久保田繁亮、各委員、西谷書記

△記事　湘南地方震災調査報告書作成に付打合せ協議をなす

○湘南地方震災調査委員會

△日時　十月十二日午後五時―九時

△會場　本協會會議室

△出席者　安井會務委員、長谷部鋭吉、村野藤吾、川口一二各委員、西谷書記

△記事　前回に引續き報告書作成に付協議す

○湘南地方震災調査委員會

△日時　十月十五日午後五時―十時

△會場　本協會會議室

△出席者　安井會務委員、本野精吾、久保田繁亮、川口一二、村野藤吾、古塚正次、長谷部鋭吉各委員、西谷書記、

△記事　前回に引續き報告書作成に付協議打合をなす

○例　會

△日時　十月十八日午後六時―十時

△會場　堂島ビルヂング一階廣間

△出席者　片岡副會頭、池田理事長、野呂理事、設樂理事、佐藤理事、園部理事、宮本長理事、武田五一、宗兵藏、横濱勉、安井武雄、小笠原銅、谷民藏、野村一郎、中村琢次郎、設樂貞三、佐々木岩太郎、森篤次郎、三木來三、池上德一、增田直一、田中勉、山形英二、難波信藏、中村吉太郎、田中勘、坪井誠一、岡本新次郎、山口榮作、久保田小三郎毛利泰三、福永佐和吉、芝田知重、高井芳雄、高田利一郎、日高胖、阪井米吉、須川鹿太郎、澤原隆夫、古川豊、森正藏、羽原德衛藤井厚二、武田經一、竹中景一、泉谷千秋、原科準平、中島春次、小西一良、前田武正、木村多督、三谷万三、前内文二郎、小寺嶺一、池田谷久吉、久保繁次郎、吉田健治、長澤榮作、能村知二、浦英之助、古宇田實、瀬戸文吾、吉田龍郎、加藤善吉、島田良藏、平井三郎、谷口德政、石井久雄、小貫賴政、渡邊義三、吉田清、北村久男、尾田大和、村上國一、鹿村萬吉、野村理一加、藤一俊、弓削兵太郎、清水隼人、田島長二郎、田中邦昌、藤村愛資、山添繁藏、道田泰治郎、上田喜三郎、奥野時三、藤木正一、寺西政一郎、杉本保一、田中浩、德光文七、東與惣次、守田米一、磯吉一、米倉毅夫、高濱利道、佐野謹三、增井敬、田中伊義諸氏及外來聽講者

△記事　一、定刻池田理事長登壇開會を宣し直に震災調査報告講演開始の旨並に講演に付左の希望を述べて降壇す

1 講演時間は十分乃至十五分位のこと

2 講演は調査せられし眞髓を話されたきこと

3 講演順序は理事長より指名すること

二、左の十六氏順次に講演せられたり

横澤勉氏、福永佐和吉氏、小笠原銅氏、設

樂貞三氏、日高胖氏、平井三郎氏、宮本長治氏、園部文雄氏、蘆井厚三氏、古川豐氏安井武雄氏、古宇田實氏、中村琢次郎氏、小川安一郎氏、武田五一氏、池田實氏

○臨時理事會

△日時　十月十八日午後四時六十分—六時
△會場　本協會會議室
△出席者　片岡副會頭、池田理事長、園部理事、野呂理事、設樂理事、宮本長理事、宗會務委員、小川會務委員、谷會務委員、安井會務委員、西谷書記
△報告　一、京都神戸市に於て震災視察講演會開催に付交涉經過報告
一、名古屋市に於ける震災視察講演會開催に付交涉經過報告
三、諸種の謝狀其他に付報告
△議事　一、名古屋市に於ける講演會に關する件
諸事打合せの爲め西谷書記を同地へ出張せしむることに決定
二、會員銓衡
山中豐三郎氏普通賛助員として入會決定

○東京地方震災調査委員會

△日時　十月二十二日午後六時—十時
△會場　本協會會議室
△出席者　武田五一、大倉直三、福永和佐吉本多二郎、設樂貞三、谷田實、古川豐、各委員
△記事　一、武田五一氏座長となり踏査したる東京方面の震災調査報告書作成に付種々協議打合をなす
二、十一月三四日頃を期し東京湘南調査委員會合の上報告書編輯會議を開くことに決定

○新入會員

（會員）河村新君
（普通賛助員）古川信治君

○退會員

（普通賛助員）城戸義起君、河合作次郎君
山田丈一君、小竹茂君、山口郊太郎君

○住所移轉

藤重土希雄君　府下泉北郡鳳町字北王寺二七〇島田方
山本一善君　市内東區上本町十一丁目紅葉寺大澤公保方
桑村種吉君　府下豐能郡豐中村大字南轟木三九五
小貫賴政君　市外天王寺村字中道資泉寺通芙蓉寮内
境正一君　阪急寶塚線螢ヶ池停留所北二丁
杜貞雄君　府下北河内郡守口町大字土居二七五
梶本福太郎君　市内西區江戸堀南通四丁目八
今村彦太郎君　兵庫縣武庫郡深江字實ノ柄一〇五五
浦野紋郎次君　岐阜不破郡關ヶ原大日本紡績關ヶ原工場
請地享之介君　神奈縣鎌倉郡戸塚町矢澤田邊伊三郎方
間猪三郎君　市内北區北野芝田町一五五
吉岡與平次君　市内西區南堀江下通一ノ五
二松井事務所
岩田篤吉君　市内西區八幡屋町八五ノ一
染井武治君　市外東天下茶屋一四八樋口勢治方
神島祿藏君　名古屋市東區十間町大同電力會社建築課
牧三郎君　千葉縣松戸町陸軍工兵學校

敎導大隊第一中隊第八班

田中　千里君　熊本縣知事

田中　數雄君　近衛師團經理部工務科

金子　巴君　小倉市外砂津住友銀行支店舍宿所內

林　衆松君　東京市京橋區新富町二丁目五

中津　季之君　市外中津町阪神北浦江電停北運河畔

寄贈圖書

庭園　八號同協會

住宅　九號住宅改良會

建築雜誌　八號建築學會

材木新聞　每號同社

金屬工業新聞　每號同社

經濟資料　八號東亞經濟調查會

都市公論　八號都市研究會

土木建築　住宅改良會

建築世界　八號同社

工業評論　九號工業評論社

帝國鐵道協會々報五號同協會

建築畫報　九號同社

國民經濟雜誌　三五卷第四號寶文館

通俗衛生　五號大阪府衛生課

電氣學會雜誌　八號同學會

朝鮮と建築　五號朝鮮建築會

工業の友　九號工手學會

滿洲建築協會雜誌九號同協會

建築の普及　九號帝國工業教育會

建築業協會月報　六號建築業協會

新住宅　九號洪洋社

電氣評論　八號電氣評論社

大阪市商工時報　五號市役所商工課

工業之日本　九號工業之日本社

名古屋工業會々報五號同會

會報　七號名古屋工業會

都人　第六光都人社

住宅研究　六號文化建築社

活人　十號同社

工政會々報　八號工政會

柊　一號柊會

早稻田建築學報　二號早稻田大學建築學科教室早苗會

日本美術協會報告　第十二輯日本美術協會

朝鮮鐵道協會々報　第八月號朝鮮鐵道協會

中央建築　第一卷第一號中央建築社

●第六集第十一号　掲載広告一覧（掲載順）

内外木工所
大野正営業所
日本エレベーター製造
島田硝子製造所
内田商事
佐倉金庫店
阿部鉄工所
ストラウス商会
日本工剤
瀧山商店
南満鉱業
文化工業
石綿スレート
吉岡商店
高谷商店
山本東作商店
服部槙商店

金剛商会大阪支店
今井硝子店
横河橋梁製作所
HANKEN SEISAKUSYO
井筒政蔵商店
森川組
佐伯捨次郎製作所
大福海上火災保険
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
片岡松井建築事務所

横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
舟橋建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
砂崎

池田勘蔵
日本土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
野村亥之助
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一
鴻池組営業所
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
有山組

辰巳吉之助
清水組大阪支店
森本建築社
銭高組
清水福太郎
大阪青写真調製所
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
高島屋呉服店
コルク工業
内外土木建築材料
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
サンタイ社
日本ホロタイル

東京建鉄
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
三枝商会
日本木材工芸
都市工業
大理石工業
ベニス工房
作田工務所
城口汚水処理研究所大阪支店
米本栄商店
田中タイリング商会
浜口商店
日本トラスコン鋼材
大阪耐火リノリウム工業
岩崎商業
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所

岡部商会
大阪金物商会
木下商店
梅原組
高田商会
政正
関西ステインド硝子製作所
桐田商会
田中昌司商店
二和商会
大阪窯業
旭硝子
筑紫商会
川崎工場
日米板硝子
山中商会
建築金物商会
北小林酒井衛生工業部
サカイブン

東洋コルク工業
境川文庫
別府ステインドグラス製作所
三宅茂雄商店
田中源太郎商店
極東板硝子工業